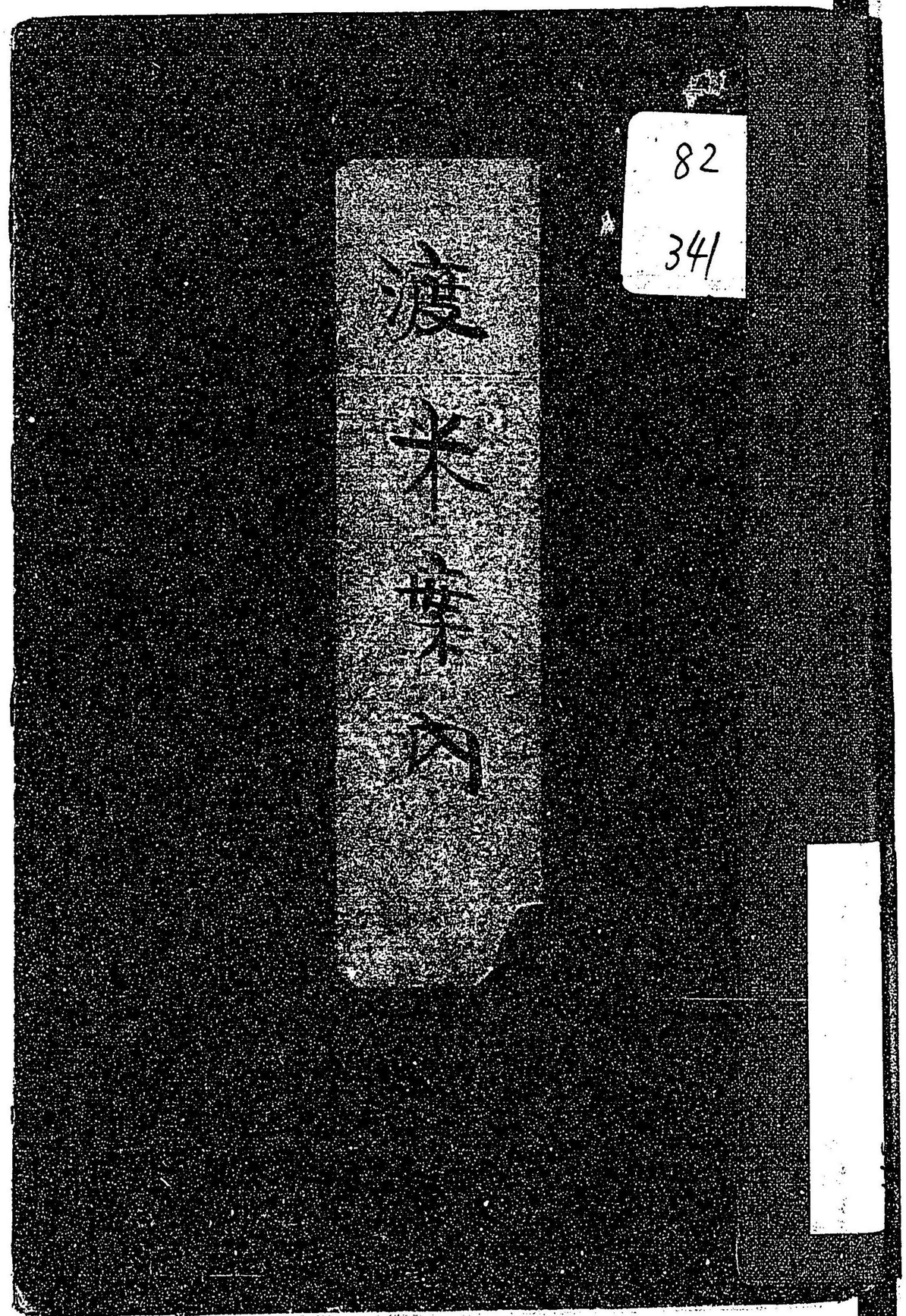


82
341

026915-001-7

82-341

渡米案内

片山 潜/著

M34, 35
ADG-0034

22-341

自序

北米新聞記者の大半ホレース、グリーリ曾て其青年に告げて「西に行け青年よ」Go west young men!と云へり。吁！此一言や北米の中部及大平洋海岸の繁盛に向つて大に與つて力ある一言なり。若しグ氏をして今日我邦にあらしめば氏は必ず「渡米すべし我が有爲の青年よ」と云はん也。吾人はグ氏の如き人格名望なし然ども吾人か歸後數年間青年に與へたる奬勵の言は其誤まらざりしを知る者なり。今や吾人は進んで其渡米を欲する者と否とを問はず我青年にして渡米せば如何と云ふ一問題に對し吾人過去の經驗に徴して解決し以て滿天下有爲の青年諸氏に告げん。

序文

明治三十四年七月廿八日

著者誌

# 渡米案内目次

總論


第一章　渡米の準備……六
第二章　船中の心得……一三
第三章　上陸の心得……一八
第四章　職業の撰定並に在米中の方針……二四
第五章　學生渡米の心得……三七
第六章　實業家の渡米……五二
第七章　著者在米中の經驗……五六

目次

第八章　渡米せる苦學生の最近書翰……
附　錄
渡米に必要なる英語……一
以　上

# 渡米者内情

片山潛著

## 總論

我日本に於ける人口增加の如何を見るに、我等同胞は三千五百萬人なりと稱して、我國力を顯揚せしことはこれ昨今のことなりしに、今や我同胞兄弟を四千萬人なりと稱するに至りしことは、實に驚くに堪へたりと云ふべし。

然るに我々が今日の日本に處して、何をかそれ急務とし、何をか謀る可きとすとならば、即ちこの四千萬の同胞に就いて謀らざるべからざると共に、この四千萬同胞の將來をも謀らざる可からざるに至れり、加之ならず日本に於ける我國民の數は、日一日と增加し來れることは其統計に依りて明かなり、若この疆りある日本の土地に於いて、無限に其國民が增加せば、我々同胞は如何に將來進步して、我々の一身を維持し至りなば宜きやと云ふ事は、我々日本人として研究を要するものと云ふ可し、固より日本の國土は小なりと雖も、

而も四千萬乃至五千萬の國民を容るゝの土地これ無きに非ずして、彼の奥羽地方及北海道の如きは尙開拓の將來を有せり。例えば上野の停車場より青森に至る迄に在つても、其曠野は連綿として如何樣其農業は發達せるを見ると雖も、我日本は斯かる有樣を以て成立てるものなるかを思へば、實に心細きことゝ云ふ可し、何んとなれば、彼の奥羽地方に到つて、先つ見ること能はざるものは即ち煙筒なり、煙筒を見ざるは工場なき故なり、抑も煙筒の多きことは機械工業の發達を示すものなるに、奥羽地方に在つて見ることの出來ざる所以のものは之れ發達せざることを表明するものと云ふ可ければなり。

此を以て日本の人民が如何に增加して五千萬人に至るも、決して日本の國が之を養ふ能はざるには非ずして、彼の北海道の如きは今日尙ほ無人の土地多しと云ふ可く、臺灣の如きは未だ其農業すら發達せりと云ふ可らざるなり、然らば日本人は吾國の未だ開拓せられざるの地を開拓し、至る所に工業を起し、內地の製造を盛大にするを以て急務とせざる可らず然れども唯それにして善きやと言ばゝ、吾人の考へを以てするに決して然るものに非ず、我日本が東洋に於て一大勢力を作し、獨立の運命を帶びて行んとするに當つては、日本は工業を盛んにして行かざるべからす、これ百人が百人、贊成するところならんと雖も、然れどもこの工業は今日の儘にして、これを盛ならしめんとするは、望むべくして得べき處に非ず、我工業を盛にし我富强を計らんと欲せは日本の國が、世界に勢力を得て來る樣に努めさるべからず、之をするには決して座して之叫ふと云ふ計りに非ずして、一躍日本の國民たるものが世界に出て、即ち世界へ日本に有る處の物を輸出し、日本の風俗嗜好をも持出し、而して外國人間に之を流行しめなければならん、斯く論し來れば先づ我人口の多き點よりするも、日本國民が外國へ移住すると云ふことの必要なることは、實に當然たるものと云ふ可きや明かなり、況んや工業を盛んにし、日本をして工業國たらしめんと欲せば幾万の人民が文明國へ移住して彼の地に我美風を移し、日本製造物品の使用の途を、外國人に向つて知らせ又之を示し、外國人に之を紹介することは、これ大ひに必要なることに非ずや。

翻つて古代の歷史に鑑みるに、グリーキの國力文明か、世界に賞讃せられ、而してギリシヤ國が當時の世界に於て、勢力を掌握したりし所以は、取りもなほさずグリシヤ人が、各地方に移住したりしによるものと云ふ可く、羅馬も猶然り、爰を以て其國力を高め、文明を益々發達せしめんと欲せば、必ず國民が振て移住に若くものはなく、彼の英國が世界に、王

業に於いても將た商業に於いても、冠たる所以んのものは、英國人が如何なる處に向つても、冒險して移住せしが故に外ならず、爰を以て其國民が移住することたるや、其工業を盛んにし、國力を益すと云ふ點よりするも必要なることは、寔に明かなりと云ふ可し。

今や外國文明の潮流は高く吾國に流がれ、今日の如き革進を見るに至れりと雖も、而も我日本の發達に就いて、日本人の最も欠點とし遺憾とする處のものは何ぞ、即ち日本人が專有たる島國根性これなりとす、若しこの島國根性にして去る能はずんば、我日本人は到底大事に當る可らざる不具のものと云はざるを得ず、故に亦團結して文明的事業に從事することの困難なりと云ふことは、已に外國人が評するのみならずして、一度外國に出てたる我日本人の中に在つても、皆慨嘆して止まざる處なり、若し果して日本國民にして、能くこの島國根性を廢て、文明の眞意を解し、其文明的根性を持つて事を作すに至りなば、即ち我日本國は、東洋の一孤島に非ずして、世界萬國に擴張することを得べし、否自然世界萬國に其國力を增進することを得るに至るや必せり、故に海外に移住若しくは出稼するは即ち國に忠義を盡すものなり、然り吾人の考えを以てすれば、我日本國民が、國を去つて遠く萬里の波濤を犯し、以て他鄉に入り、外國に於て一事業を企て、一身の經濟を立つると云ふことは、これ國民として最も忠君愛國と云ふべきものたることを信ずるものなり、故に日本の物品が益々世界に輸出さるゝことも、工業の益々盛んに至るも、將た日本の人民が智識を增し進歩することも、又日本の國人をして其勢力を伸張し商工業を發達し得ることも、皆之れ多くの平民が移住し、又は出稼して外國の事情に通じ、事業を企圖するに職由するものと云ふ可し、例へば爰に立派なる一株の木ありとせんに、これに肥料を與ふると與へざるとは幾何の差を來すやは云ふ迄もなく、其肥料を與ふるはこれ、其植木を發達せしむる一手段たるや疑ひなし、移住も亦其の如く、外國に移住し彼地の文明的財源に浴し、或は多年の後我國に歸り、國を善くし、種々なる方面より、日本を助長せしむることは、恰も植木の肥料を待つて、其國人の手により風雨の難きも輙く之を凌がれて、發達助長せらるゝものと夫れ同じきのみ、彼のアイリシ人を看よ、彼れが位置は如何、其土地は如何、其財產は如何、彼等は外國に窄れなる程の、位置の低き、土地を所有せさる、財に欠けたる者なり、然るに彼等は一度其外國に移住するや、數年を出ずして財產を作り、米國に於ける政治の上に在つても、其學術に在つても、其社會に於いても、其一勢力と成れるものは抑もこれ何に基いするものなりや、これ敢て說く迄もなく移住の功に非ずして

何ぞや。

以上陳ふるが如くなるが故に吾人は移住の日本國民に必要なるとを說きて罷まざるなり、然れ共爰に吾人が其移住すべき人に就いて言はゞ、東京に在る富裕なる所の學生よりも、寧ろ勞働に從事せる人を以て宜しきものと看做すものなり、何となれば意志薄弱なる學生が金を握つて移住するよりも却つて農家の子弟が無一物にして移住するも、其忍耐力の强きことを信ずればなり、又移住すべき土地を以てせば吾人は米國を以て目せんとす、何んとなれば米國に移住するは、他に移住する如く、移民會社の手を經ずして、獨立獨行、自己の力により自由に事を爲す可ければなり、爰を以て移住せんと欲するものは、先づ米國に渡りて事を企つるに若くはなきなり、乞ふ諸氏宜しく後篇に掲ぐる處に鑑みて猛省一番奮起するところあれ。

# 第一章　渡米の準備

凡そ世間萬般の事柄は爲して見れば夫れ程困難なるものにあらず其方法と順序を知らざるに依り又は誤るに依り困難に陷り又は失敗に終るなり其成功せし者に就ひて聞ば多少は種々の困難なきにしもあらず然ども多くは其事業に順序を誤らざると深思厚慮して耐忍と勤勉を以て事に當れるにあり都ての事業には順序あり方法あり先づ方法を講じて確乎たる定見の下に不撓不屈の精神と耐忍を以て順序正しく進行せは十中八九迄は成功を期すべきなり富岳に登るも一見非常なる困難の如く見ゆるも一朝決心して歩一歩を以て進登せは決して不可能の事にあらす世間の事亦然り世人の多くは云く金あれは必す何々を爲すべし何々たる易々のみ如何せん貧なりと知らずや古今大業を爲したる者大發見を遂けたるもの大發明を完成したる者は概して金錢ありての所以を以て成功したるにあらず其の多くは身貧賤より起り百難を排して其目的を達したるを世の事を爲すは金錢にあらす人なり資産位置にあらず人物と其決心なり故に吾人は社會の改良を唱ふるに當り敢て富豪家に諂諛せす權門に伏從して其力をからず世の事を爲すは先つ人物其人にあるを信すれはなり思慮と熱心と耐忍ある人に依て成るなり是れ吾人か我苦學生に向つて渡米を勸むる所以なり著者か歸國して茲に五ヶ年なり其の間我青年にして渡米の志あり志望ありと云ふて特に余を訪問せし者數百人なり其の志を立て大決心を以て渡米せし者も亦數十百人あり余か直接に添書を附して渡米せしめたる者亦五十名以上に及べり其内には人力車を引きて生活せし者あり新聞

配達をして勉強せし者あり牛乳の配達者あり丁稚より決心して渡米せしあり鍬を投して渡米せしあり工場を辭して渡米せし者ありて多くは苦學生なりき而して彼等は皆其決心の誤まらざるを報じ其の今日に滿足して孜々研究せる者のみなり余は渡米を望む者に對して特別の事情あるの外は斷然渡航すべしと斷言せり此可否は余今茲に喋々せざるも卷末我渡米者の書面を以て讀者自身をして自ら決せしめんとす余は渡米者の準備に就ひて聊か述ふる所あるべし著者か社會事業をキングスレー館なる名稱の下に起し神田三崎町に住居せしより既に五ヶ年なり此五ヶ年間幾千人の學生に面會せり其の渡米を期望せらるゝ者實に多しと而して其の渡米に關しての問や種々樣々なり又其渡米を期望する程度も樣々なり或は只渡米の狀況を知らんが爲めのみにして態々刺を通じて著者を訪問するあり或は既に決して其方法に關して問來るあり又は既に渡米は決心し尙ほ準備して只紹介を求めん爲めに來るあり故に其答へや千度一律なるとを得す其人に依つて答へざるべからす今述べんとする所の事は前者各種の期望者の望みを滿たさんとする者なり。

渡米者の最も心配し且つ問かんと欲する事は彼地に渡航して資金なくして生活し且つ勉學し得るやにあり。是れ渡米者に取りては一大問題なり太平洋を越へて米國に行く其無一物の身を以て生計を營み且つ學問を爲し得るや否やは實に重大の問題なり又是に次て必要なる問題は吾々如き者にも彼地に行き何かを爲して生活及勉强し得るやの問題なり第一は大躰の問なるも第二は直接一身に關しての問なり乞ふ吾人の經驗と知識を以て答へしめよ何かの問は「職業の撰定」なる章に於て詳に述べたれは茲に論せさるべし。

抑も北米合衆國は世界にて最も自由國なり、其工商業の發達に於ても經濟の進歩に於ても學業の發達に於ても世界無比に一大進歩をなせる國なり其最も異る點は勞働を重する事なり勞働は神聖なるてう語は實に北米に在つて實行されたる金言なりとす從つて勞働賃銀は世界中て一番高しとす故に勞働者は高位地を占め居るなり勞働して學問を爲すと云ふことは決して珍らしきことにあらず我邦人が渡米して苟も健全なる身躰を有し双手を働かして以て其の志望を達せんとせは決して困難ならず多少困難なるも斷じて不可能の事にあらず必然出來得る事なり是れ吾人の斷言して憚からざる所なり、卷末の書翰は其好固實證なりとす吾人は云はん渡米したら又は渡米しての先はたら、から及先は等の言に就ひては更に心配する必要なかるべしと是等に對する良答は余は金石も貫く決心を有せり余はロッキー山よりも高き期望と目的を抱けり余は耐忍と熱心と奮鬪不挫折の健全なる

身躰を有せること是なり此等の實躰を有するか他に必要なる者なかるべし或は云はん船賃は如何上陸金は如何と嗚呼是愚なる問にあらずや上來記したる三個の資格を有する者の問ならんや上記の資格ある者は決して斯る問は發せさるなり。

渡米者か彼地に行きて必要なる者は右三者の外になし三者を備ふる者は他に求むるの必要なかるべし三者を有するか其目的を達し得るや火を見るより明白なりとす著者が渡米者の準備を記するに當り上記の三者を有する者に向つて告げんとするなり渡米者か健全なる志想と健全なる身躰を有することの必要は既に記せり之と反對に肺病又は心臓病の有る人は斷して渡米の望みを起すべからす兩病氣者は決して生て歸るを望むべからず

渡米者か準備をなすには貧生なるか先づ金百五十圓を得べし是は五十一圓の船賃と六十圓の上陸金（見せるだけなり）で百十圓と殘る四十圓で渡米の支度及船中の小使に充つるなり旅行免狀を得る事は必要なり戸主にあらざる者は後見者の承諾書を得るを要す而して皆二人の保證人を要す此保證人は公民權所有者ならさるべからず而し其手續及び願書の躰裁等は郡區役所に就ひてたゝすべし抑も旅行免狀は一の厄介物にて渡米後は何の用もなさず只我邦か之を下附するは渡米者の煩勞と面倒を感ぜしむるの外他に必要なきものなり併我邦人か海外に渡航するには是非とも所有せされは乘船切符をも購求出來ざるべし故に第一は百五十圓第二は旅行免狀なり海外旅行免狀を得るには仲々日子を要すべければ手後れせざる樣に注意すべきなり。

既に旅費の百五十圓と旅行免狀を得たる上は行李を整へざるべからず先づ洋服を一調しシヤツ二三枚、ヅボンシタ二三、ハンケチ（六つ位）靴足袋（半打）靴一足、靴ハケ及墨、カベン一個、トロンク、又は布にて苞みたる柳行李一個、齒磨及其粉、シヤボン、鏡、ハケ、櫛、カミソリ、ハット英語字書一冊、洋服も背廣にて宜しくなるべくは古手にても二組位は必要なりとす、ケットー一二枚、日本服もあれは一二枚は所持すへし羽織ハカマも所持すべし必要事あるべし手帳を携へ常に日記を留めるは必要なり。

英語は知らさるも左程の差支はなかるべし英書を少し位ひ讀み且つ字引位ひ用ゐ得る事は必要なり少し困難せは我邦て三年英語を學ぶと彼の地て三ヶ月學ぶと比等すべし何を苦しんて語學を我邦て學ぶの必要あらんや宜しく便利なる彼他へ行きて學ぶべし知つて損はなしと雖も英語を知らざるが爲めに渡航を躊躇し又は金を出して準備の一とするか如きは得策にあらず必要なる言葉は船中十四五日て充分なるべし高等學校卒業生も二三ヶ月は英

語に困難するが常なりとか故に彼地て學ぶにしくはなかるべし是れ吾人が彼の勞力と耐忍と熱心を資本として渡米する人に向つて云ふ忠言なりとす

既に旅行発狀、旅費及行李も整ひたりとするか前以て問合せて定めたる出帆定日前日位に横濱に行き船宿に依頼するも可なり友人に托するも可なり出帆の手續をなすべし船宿に付き出帆するは二三圓の入費を要すべきも不經驗の爲めにマゴツク事なかるべし郵船會社の船にて行くか其切符は直接に買て種々樣子を聞けば左程の困難はなかるべし横濱なとては或る船宿は不評判もあれば注意すべし前以て船宿と交渉して餘分に横濱に滯在していらぬ入費を徒費せぬ樣注意すべし。

船中にて下等乘船者は水を貯へ之を飲む器具と顔を洗ふブリツキのタライ必要なれば兼て用意して乘込むべし其他餘裕あれは船中にて食する鑵詰物、果物等を買ふて行くべし是れ十四日間粗食して行く事なれは必要なるべし以上は吾人が渡米者目前の準備として述ぶる所なり一歩を進めて準備を云ふか渡米者は我邦にありて出來る丈け勞働に從事して身躰を鍛練すべし腰を屈して爲す仕事の如き掃除の如き出來出べくんは西洋料理の如き西洋洗濯の如き經驗は此の上なき資本なりとす而して最も要用なるは耐忍なり然り耐忍は渡米者準備のアルハヲメがなり。

# 第二章　船中の心得

凡そ故郷を去つて、外國に渡航せんとするものは、例令細民たりとも、又學生たるも、將た商人たるも、勞働者たるも、其身は如何に賤劣なる位置に居るものも、瞬時も忘却すべからざる一事あり、即ち日本の國民である、吾人は日本の國を代表して居るものなり、日本國と共に浮沈して行く處のものなりと云ふこと是なり、是事は如何なる者も如何なる處に在りても決して忘却するなく、記臆せずんばある可らざるなり。

彼の英國を看るに、其到る處に勢力を振て居ると云ふ原因は、果してこれ何によるかとならば、彼れ英國人は何處に到つても、必ず英王の臣民である、大英國の國民であると云ふことを誇て之を稱へ、英國の國歌を歌て誇ると云ふことは、これ英國人の英國人たる特色にして、自國の躰面を保ち益々勢力を得る所以なり。

抑も我日本國民中、種々困難の境遇に居しものが、爰に用意をなし行李を調へ、これ迄住み馴れつるところの古郷も見捨て、其竹馬の友として親みたる親戚朋友を見捨てゝ、而も

海外萬里の彼方に向はんとするものにして、これしきの覺悟なくして可ならんや、決心なくして止む可けんや、若し悉くこの移住民にして、此くの如きの見識を以て、怒濤逆捲く太平洋を航海するところのものならんには、我日本の國民が至る處に、この大勢力を奮ふことの出來得るに至ることは決して疑ひなし。

然るに今日渡米する移民の實狀を見れば、實に慘憺たる有樣にして、先づ彼の布哇移住民の船に乘らんとするところの狀態を見よ、身には日本服を纏い、裾をからげ、足には麻裏草履を履き或は草鞋を穿ち、手拭を以つて頬被りをなし、人參を二本大根二本を肩にかけ、得意然として恰も隣村の市場より家に歸るが如き躰(ていたら)爲くを以てす、これ即ち外國船中に於て彼の水夫の爲めに、土足を以て蹴られ輕蔑せらるゝも、敢て無理ならざると云ふ可きなり、然れ共今日の渡航者にして、少しの注意を加へなば、決して水夫の土足にかけられ輕蔑せらるゝこと非ざるなり、吾國民として彼等水夫の土足にかけらるゝとは、誰か慨歎せざる者あらんや。

吾人は爰に外國に渡航せんとする人のために言はんとす、其最も注意を措く可きことは、第壹身裝(みなり)をよくせよと云ふにあり、併しながら決して好き高價なる金を拂ひ、立派なるものを着よといふに非ず、鄕に入つては鄕に從ふの例えにして、其外國に往かんと欲せば外國の風俗に從ふこれ當然のことなりとす、例之古手の洋服たりとも、垢じみたるものに非ざれば可なり、又兵隊の履き古し靴たりとも可なり、これを穿ち、又麥藁シャツポたりとも、或はつぎにて制えしキャップたりともこれ亦必用にして、詰り彼れ西洋人が見るとも「奇妙な人間」であるとの感覺を起さしめざることを以て必要なりとす、何んとなれは、凡そこの衣服たるものは、其人々の思想を現はす所のものなるが故に、第一西洋に行く目的なるを以て、其西洋人の如き衣服を着けることは、鄕に居て鄕に從ふの道に均しきなり、又航海中は時期より最も熱さを感ずることありと雖も、然れ共日本人の惡習たる、裸躰(らたい)となり、船中を走け廻はり、或は帶をも爲さずして居るが如きことは注意して慎む可きことなり、固より熱さを感ずればとて、若しも餘り亂雜なる風をせば、日本人の躰面を瀆がすと云ふことを知覺したらんには、たとへ窮窟なりと雖も之を忍び能はざるものに非ざることを信ず。

次に船中に在つて如何なることを爲してよきやと云ふに、先づ西洋人の風習を見倣ふに在り、其起居動作に目を注き、萬事に心をつくること尤も必要にして、又便處に到るに於い

ても、餘り不潔なやり方をして西洋人に輕蔑せられざる樣に注意すべし、而も最も必用とする處のものは、清潔なるを要す、同時に起居動作に規律あることこれなり、並等に乘つて移住民の旅行切符を持つ者が船中必ず携ふべき物品は多くありと雖も、石鹸、手拭、齒磨及楊枝の如きは欠ぐ可らずして、寢具には蒲團を和敷に苞み所持するより赤ケットーを一二枚所持するの輕便にして躰裁よしとす、又剃刀の如き亦必要なりとす、先づ之れらのものをして成る可く便利なる手鞄に納め、己れが寢所の傍に置きて日々の用に供す可きなり、サテ横濱を出帆して米國に至らんには略十五四日を要す、この間何を以て徒然を慰めん何をか樂しみ、何をか心掛く可きやと云はば、第一西洋人に對して傲放ならず、躰裁をよくし、輕蔑を受けさるように勉め、其身は重大なる責任を帶び、義務を盡す可き最も大切なる身躰なることを忘れざる樣なし、酒を飲み歌を歌ひ、或は浮連節、或は淨瑠璃、或は落語と大聲を放つが如きことはこれ迄の風習なりしと雖も、斯かる事は如何に徒然なりとて爲すまじきことにして謹む可きことなり、尙ほ進んで吾人が渡米の諸氏に勸むるところの事あり、最も學生若くは商人、紳士、貴顯には此くも勸むる要なからんも敢て今これに注意を加えんとす、何ぜなれば、これを知れる人にしても猶研究せずんば足らざるが故なり、悉くこれを知れる人と云ふ可らず、茲を以て吾人は勸むるに英語の研究を以てするものなり、又行く所の國狀を知らざる可らざることを以てす、固よりこの國狀の如きは萬國歷史を讀みし處の人は知れるならんも、尙己れが其米國に於いて其身を內るゝが上より深く研究を實際に當てゝこれを爲すは大いなる利益たるや明かなり、宜くこれ等の書類は乘船に先つて用意を爲すべきものなり、而して船中に在つて其語學を研究すと云ふも、一朝一夕に出來得るものならざれば、恰も敵を見て刀を研ぐが如しと雖も、然れ共之を研がざるよりも寧ろ勝れることを信ず可きなり、例へ十五日一日一語を覺ふるとせんも十五の言語を使用し得べし、若一日二語を覺ふとせんか即ち三十の語を使用し得べし、これに準じて一生懸命に一日二十の言葉を覺ふとせは即ちこの十五日間に在つて三百の言葉を使用し得るにあずらや、こゝに至つて吾人は一字千金の格言の適することを明知するを得可きなり、夫れのみならず上陸の後に至つて、其職を求むるが上に於ても、其根據を定むるの上に在つても、大ひにこれが力となり資料となることは實に明かなり、故に吾人は卷末に其必要なる語を撰んで以て移住渡航者のためにせんとす、願くは志あるもの余輩が言を信じて酒を呑み歌を謠ひ或は躍りて其風儀を瀆さんよりは、寧ろこれ等の研究を以て心に据へ、

己れが前途の慰めたらしめんことを勸告して止まざる而已。

# 第三章　上陸の心得

既に吾人が注告に從つて、洋服を着す可きことの必用たることも分り、起居働作も歐洲人の爲す如く所謂西洋人の爲す如く爲す可きことも分り、其英語をも略、吾人の示せるものにより之を暗誦して、これに依つて一つのものに就いて話も出來得るに至り、又自分の目的とするところの米國の人情より風俗、土地の習慣、其思想をも略心に書き得てこれを知覺する迄に、船中に於いて用意準備が爲されたりとせば、吾人は其上陸に對して喋々と言論を爲すべき必要なし、然れども其上陸の際に當つて、殊に航海者其人の注意すべきは、國を出てこの十五日間と云へるものは、旅店と云つて可るか將た寢牀と云つて可るか其船中に在つて、唯彼岸に達するの豫想を以て談話の中に樂みつゝありしも、未だ見しことなき新世界に向つて、日本の殖民又は學生と云へる着板を懸けて上陸する所のものなるが故に、其準備として着船の一日前よりして、先づ豫て用意したりし剃刀を取り出して、生へ伸びし顏の髯を剃り、其れより着物の塵を拂ひ、靴を磨き、身裝に注意し、己れの物を取り纏め、確かと保護することは大切にして、殊に自分の切符を大切に所持すべきなり旅行に不經驗なる人に在つては、上陸の際に其必要なるもの大切なるものを忘棄することは間々ある習ひなれば、必すこれ等の點に注意し、如何に混雜の中に在りとも可成的身裝を能くし、荷裝を能くして、まさかの時に狼狽し物を忘れざる樣注意に注意を重ぬることを忘るる可らざる也。

而して其航海船の港に着すること朝なりとせば、必ず其日の中に上陸することを得べし、其上陸の際に當つて第一心得べきことは、米國に於ける移住民取締規則と云へること是れなり、この移住民取締規則と云ふことを研究し、其れを充分に心得て後、上陸の際係りの官吏に向つて、彼れが問ふに從つて之に答ふるの必要あるが故に、其際にこれを間違へざる樣齟齬せざる樣答へざるを得ず、本より確たる規則の存るものなれば、之を作つて答へる如きことは可ならず、故に若し移住者其人が、これを知らざるがためこれを心得ざるがために、上陸すること能はずして空しく歸國せずんばあらざる如き境遇に陷るやも圖られざれば、宜しくこれを心得て、取締の上に在つては身分の位置を明かにし、其目的を明かにすること抔は寔に必要なりとす、移住民取締規則は上陸の際移住民掛り官吏か船に來り

取り調へをなす手續なり移住民に問ふ問題なり、知何に答へたら自分の上陸の目的を達するかと云ふことは、自分の判談の上に在ることなるを以て、移住者其人の宜く研究すべき處なりとす。

抑も彼の移住民（學生でも下等の乘船切符を持ては同樣）か上陸に際し大底は我領事館の書記と稅關官吏が來りて取調べをなす其重なる尋問の々條は左に掲くる者にして全躰では二十ありとす尋問々條の重要なる者は、

姓名、生年月、有妻又は無妻、職業、讀書、渡航の目的、日本に於て現住所、上陸地目的地乘船切付は誰か買ひしや（自分か又は他人か）所有金三十弗以上ありや、此度が始めて米國へ來りしや否や、米國に親族朋友ありや否や、罪を犯し入獄せしことありや否や又は貧民救助を受けしことありや否多妻敎の信者なりや否や、健康なりや否や、片輪者なりや否や等にて上陸し得る最重の資格は自費て航海切付を求め、尙ほ三十弗の所持金を上陸の際に有することなり。

已に其稅關に於いて身元取調べも濟み、上陸を爲ば如何なる處に赴きて善きや、これ諸君が最も注意すべき處のものにして、何處の國に於いて彼の所謂濡れ草鞋をぬぐと云ふ、一の新しき處に行いて第一に投宿するところを擇ぶと云ふことが必要にして、丁度彼の田舍から何かに有附ふとして東京へ出て來るものに均しく、若し彼等が淺草ならば萬年町とか、四谷ならば餃々橋邊に居て、而して其仕事を求むるならば、東京の人間は必ずこれを顧みるとなく、却つて之を恐るかも知れない位のものにして、立派なる事業に從ふと云ふとは出來ざのみならず、其交はる處の人間は皆下卑にして其關係する處のもの罪人ならずんば詐僞師等の者か多數であると云ふ樣なる事情なるを以て、俱に其投宿すべき濡れ草鞋を脫ぐ可き處を穿鑿するとは、一身の利害に大關係を及ぼす者なりとす、元より彼地に在つて旅店を開き下宿屋を爲せる者少からざれ共、其れ等が皆日本の躰面を維持する者計りなりと云ふ可らず、中には信實同胞を愛すると云ふ者ある可しと雖も、詰り上陸せし時には、必ず少くとも二十弗、三十弗の金のあることを知るか故に、其れを目的に信實を見せ、善き仕事を見出して周旋すべし抔と云つて、而も甘言を以てこれを導くと雖も、所謂金の無くなるのはこれ緣の切れ目にして、遂に追い出すと云ふ處の者なきにしも非ざるが故に、如何に人の甘言を以て我を導かんとするも、決し其の口車に乘せられ、悲境に陷いらざる樣勉むるは、これ移住者に取つて大いに心掛く可きところのものなりとす。

前きに先づ言語も習得せるを以て、日本人が營む宿屋に授ずるのも必要なりと雖も、爰に一々指名はせざるも、就中宜しきは其日本人の内各縣人は其會を有する故に此に向つて行くは最良ならん又宗敎の會に行き相談するは誤りなかるべし、而して今日何處に行くと雖も、太平洋海岸に在つては、基督者傳道會、青年會の如きは立てられつるを以て、然ういふ處に於て手緣を求めて行くことは、最も其人に在つて堅固なることにして、決して誤魔化されると云ふ如きことは更になし、殊に傳道會抔には職業を世話する處もあるが故に、又止宿して居るに當つても甚だ安價なりとす、之より傳道會の如きは慈善の爲に爲ることなれば、移住者皆が皆止宿することは到低能はざるを以て、市中の實直なる宿屋に宿泊し實直なる職業周旋所に行て口を求むることはこれ最も必要なりとす、吾人は何宿屋は惡ひ何々はよいと一々あげ之を評するを好まず只此位に注意して置けば渡米者自身の判斷で決することか出來るべしと信ず注意に注意を加ふるは必要なりとす、而して殊に吾人が日本人に注意を援かんとすることは、其外國に至り其新世界に赴かば、先つ其狼狽せんとする の心を靜め、專心して前途のことを考へ、專心に修養することを考へ、決してうろたへることなく、他人の甘言に乘せらるゝことなく、自ら決心して一身を誤まるとなき樣に注意せらんことなり、殊に太平洋海岸には無賴漢も多きを以て、獨立の精神を養つて其れを以て自ら身を處して行かずんある可らざる也。

然らばこの獨立の精神を保ち、身を處して行かんととするには何をかこれ必要とするかとならば、先つ二つの要件あり其一は取りも直さず、これ經濟である、即ち金錢を大切にすると云ふことは、最も必要なりと云ふ可し、諸君は國に存る所の僅少の財産を擧げてこれを質に置き、或は他年苦しんで作りし處の金を懷ろにし、先づ四十弗乃至五十弗の別に用意をして以て渡航を外國に試み、事業を果さんと志すものなれば、例え儲け得可き金にもせよ、或る意味に於ては命が在るとも命よりもの猶尊しと云はざるな得ない金なるとを知覺して、これを使ふにも必ず經濟的に使はねばならん、これを上手に使ふことを志すことは最も肝要なりとす、固より人情は弱きものなれば、大平洋上一小瀛船の中に在つて、而も其むさ苦しき船室に於いて、二週間以上も苦吟せしところの者が、待ち甲斐ありて漸やく上陸するを得たるものなるが故に、新しき天地、世界の大陸に上りしものなるが故に、所謂喜びまぎれの飲食にふけり、彼方散歩しては美果を喰ひ、此方に祥徊して旨酒に耽り、此くの如くして二三周間立つか立たざるに使い果して、囊中空しきに至りて後漸やく嗟嘆

の聲を發するもの少からず、抑も大平洋海岸には親切らしきものありて、其のものを誘い諸所に導き、自分等が職業を周旋するらしき言を喋舌り、而も其者を遊惰に引いて金を使はしめるもの往々なるが故に、渡航者は之等に就いて大いに注意しなければならぬ、即ち金は命の綱なであると云ふことを自覺し、金はなくとも命ちさへ在れば何ふでもなると云ふ如き、根性は、斷然打捨てなけれならんと云ふことを嘗すら注告して止まざる也、今一條件は精神上の敎育修養を爲すにあり成るべく宗敎を研究して敎會にも行くを努むべきこと是れなりとす、吾人は之れより進んで渡航して後、其米國に止まるに、この周旋人の種々なる口入に、如何なる職業を得たならば善きやと云ふことを以て後章に之を詳かに說明せんと欲す、願くは後章を讀んでこれを深思考慮せよ。

# 第四章　職業の撰定并に在米中の方針に就て

日本人が渡航の目的を果し、一朝米國へ上陸し得たる後に在つて、永く苦吟の中に在りし船中の疲れも癒り、漸々其心も落着き、米國の有樣も狹しと雖もこれを見聞することを得て扨て自分の囊中には、十數弗か或は四五弗と成りしを以つて、爰に於いてか仕事を求めて自活をすべしと、其自活の方法を求むるに當つて、我は如何なる仕事を求めて宜きやと云ふことの其撰定である、これは最も深く且靜かに考へねはならん。

本より米國は文明の國なるが故に、種々なる職業あれば、其這入る可き口も最も多く、其人物も皆機敏にして、勞働者の如きも活潑に働いて仲々日本の勞働者の如きものに非ず、然るに日本人としては、其米國に於いて從事す可きところの仕事の、區域は甚だ狹き有樣にして、その從事すべき仕事の中にて、先つ日本人の今日働ひて居るところのものを見れば、ハウスウォルク、コック、ウエーター、洗濯、木据、果物むしり、農事、鐵道工事、行商、其外受附、小僧、スクールボイ等にして、これに從事せんと欲んるに當つて、誰れにでもこれ等の仕事が皆出來得るものとは云へざるを以て、人々に在つて自分の箇々別々の資格が在る可く、又目的上出來る仕事にして好む仕事をなさず却て、他の困難なるとをもせずんばあらず、左れど先づ彼の地に至つては、これを二分して戸外に働くものと、家内の働きを爲すものと區別せば可なり、無論外で働かんとするものは躰力を用ふるものにして、内に働くものは氣を使い思想を使はずんばあらず、詰り其身に敎育を要す、吾人は先きに其内に働く所の職業の種類を說かん。

先差し當り輙くして、亦仕事の口多きのは、ハウスヲルク即ち家事の助けを爲すところの勞働なりとす。ハウスヲルクは日本の所謂「おさんどん」或は權平のする仕事にして、其働きは如何なることをなすものなりやと云ふに、先づ朝は早く起きて直ちに火を焚きつけ、而して門廻りを一と掃除し、追々には一寸した料理の一つもするものなれど、最初は先づ料理人の手傳ひをなし、夫れより案内のもの、寢室を起つを見て茲に窓を開け、宅の座敷より各室を奇麗にし、これ等の用を終ふれば即ち朝飯の手傳をなす、それより朝飯を終ふれば皿を洗ひ鍋を洗ひ、臺處の掃除をなし、直に窓の硝子を拭ひ、若しくは室内の掃除を一層念を入れてせば最早や十時頃に至るべし、こより晝飯を濟ましなば爰に臨時の用を命ぜれてこれを爲す、凡そ二時間位の餘暇ありて、亦晩餐の手傳ひをなし、食時を終へて例の如く其不潔物を捨て、滌ふものを洗ひ、臺處を掃除せば此で己れが用即ち義務全く了はつたものと云ふべし、これよりは例え勉强をせんと欲せば勉强をせよ、内に居らうと或は外に出やうと己れの勝手次第にして即ち自由の身たることを得べし、これに依つて己れの怠る可らざることは、即ち其命に背かず其用を怠らざることこれなり、若しこれにして怠るところあらんには大いに遣責を蒙らざるを得ず、然りと雖もこれに反し、果して實直にして勤勉、命に違背せず機敏に且つ熱心に働かんには、爰に家事の大切なる鍵鑰をも委托さるゝに至るべし、これ西洋人の特色にして其信用を重んずる所以にして、餘程其文明的の有樣なることを知らすんばあらず、最もこのハウスウォルクは、金錢の儲けは少くして壹週間に五弗位が通常の賃銀にして、八弗九弗を儲けんとするものは、餘程苦まずんば儲け得ること能はず、併し乍らこのハウスウォルクに從はゞ、家僕の身なれば、左程立派なるものを着るに及ばず、經濟にして便利なりと云ふ可きなり、而して毎週必ずしも洗濯をせねばならず、それには火のしをかくることあるは定まれりと云ふ可し、然るにこのハウスウォルクは左程困難なるものにあらざるに、日本人として成功せざる所以んのものは、即はち日本人に於いて耐忍なきがためにして、日本人の働作を見るに、非常なる苦しき仕事をなすに之れを急ぎ、忽ち疲れて休むと云ふ如き仕方にして、其極めて樂なる仕事をなすには、却て困難なりと爲せり、彼の牛は千里を遠しとせずして歩のむと云ふことは、これ支那人には適するものならんも、日本人には適するものに非ずと云ふ可し、又このハウスウォルクは面白いと云ふ如きことはなきものにして、三百六十日の間、一も異つたことゝてはなし、固より壹週間の内に在つては異つたること無きにしも非ずして、先づ洗濯を

する、火のしをかけるとか或は風呂場を掃除し、雪隠を清めるとか、或は日々の食物に於けるも壹週間内に異はりしものを料理すると雖も、其次の壹週に至れば、即ち唯前の週間に在つて爲せしだけのことより他に爲すことゝてはなし、而して日曜日には別段に此事として爲すことなく、唯食事の關係丈にして、其他に爲すべきことなし、されど吾人が前に云へるが如く、決して怠ることなく常に謹まずんばあある可らざる事にして、謂はゞ束縛されし身にして、例ひ用ありとも一寸他出するからとて、人に己れの爲す可き用を委托して行くと云ふ如き事は決して出來ざるなり、然るに今云ふ如く仕事は唯壹週間に在つて爲すことを操り返へすのみのことなれば、恰も望遠なる途を除々として進んで行くが如き風なるを以て、例え月三十弗づゝの給料を得るに至るも、屹度何か他の仕事が仕たいと云ふことに成つて、而してハウスウオルクにては成功する人が實に些少なりと云ふべし、左れど若し忍耐を以て大成を期してこれに當れば、日本に於ける下婢下男の如きものに非ずして彼れを命じこれを命ずと何も斯も命じ附けらるものに非ず、唯己れが爲すべき義務は定まれるものにして、そのれにして怠らずすば可なるものにて、極めて輙き仕事なりと云つて可なり、又たこれにして勤むる中には、追々熟練して手もつんで巧者になり、語も段々分つて來る、其れで洗濯も遣るからこれも覺える、遂には白きシャツをも洗濯し得らるゝ樣に至れば、或は洗濯屋に奉公して洗濯屋とならん欲せば、金さへ在ればこれを始めることも出來ざるべきものに非ず、而して一方に於ては料理人となるをよしとす、先づ毎日々々仕事を覺へ、料理方を見習ふと云ふ有樣に注意して、其料理方の一つ二つ覺へてあらんには料理人の代りも出來、料理人の入り代りあるに際しては、其代りと成つてやることに至れば、即ち料理人として世に立つことを得べし、然るに一通り洗濯も出來れは、また他のよごれもの即油の附いた物は何によつて取り得らるや、或はしゆみも除くには如何にして取去らるゝや、夫れのみならず日用の事物缺く可らざることにまで、これを覺へこれを實行し得らるゝに、至れば、ハウスウオルクを即ち卒業する者にして、爰に至つて月に三十五弗乃至四十弗の儲けを爲し得らるゝものなれども、而も其位置に進むものは殆んど、十人に一人あるなしと云ふも可なり、これ日本人に耐忍なきが故にして惜む可きものとす、併し乍らハウスウオリルクの如き家事の働けるものにして、料理店の雇人にならんとするは、先づ難かしきものと云ふ可し、即ち途が違ふと云ふて可なり、若しホテルのコックとならんとするには、第一大きなるホテルの料理屋と云ふ方面の口を求めて入りこむべし、

其ホテル、料理店に在つて其處で皿洗ひをなす、又腕の丈夫なものならばパン切を爲す、これ等が先づ料理人となる緒、即ち初歩と云ふ可し、抑もホテルでこの皿洗ひの如きは如何に働くものなるかと云はゞ、朝食後其處等に積み重ねる器具を取纒め之れを洗い清ふして、これを了はらば十時頃より十二時迄は己が部屋に入つて寢ね、赤十二時の中食後に朝の如く之を洗ふ終はらば亦二時間計りは己が部屋に在つて伏し、亦夕食後に至つて其の如く彼れを洗ひ此れを滌ひて爰に己れが義務を了はると云ふ可し、故に斯く己が部屋に居つて休む暇を以て、人の料理する所を見習い、自らこれに當る覺悟を以て熱中して注目し、己が胃の腑に呑み込まんと欲せば、實に輙きことゝ云ふ可し、謂はゞ皿洗ひ抔と云へるは遊ひ半分と云つて可なり、然るにこれ又日本人として成功し得ざるものは、永續してこれに當るの根氣なきがために外ならず、左れど家事に働くものにして金の儲け得られ金の殘るものはこの料理人に他ならず、其の爲す所の働きはハウスウォルクの如く萬屋に非ずして其爲すことは皆定れり、而も一の見識を有す、何んとなれば一度この料理人となりたらんには、即はち臺所を引き受ける、臺所を支配すると云ふことに至る、固より甘いものは口に飽く可く、又た衣服の如きも自ら洗濯屋に送らざるも、ホテルならば先方に於いて爲し與へらるべし、爰を以て別に金を使ふ可き必要の希れなるが爲に、自然儲けし金は丸殘りとなる位のとにして、貯金を爲ずんばある可らざるに至る可し、而して米國に在つては、コック即ち月二十五弗を得るコックは一の職人とせられ職人として取扱はれつゝあり、而も讀み書きに至つても、其料理の目錄を爲くるに必要なるべく、亦出納に關しても必要の點少からざれは、一通りの敎育も要すべし、且つ巧者なるものにあらざれば爲しとぐる事難かしかるべしと雖も、己れが心掛次第にして、例へ閑村農事に從ひしものたりとも、これを學ぶに忍耐を以てし、其閑に讀み書きをも心掛けたらんには決して爲し得ざるものに非ずして、即ち其經驗に依つてこれを習ひ得ることは吾人の確信する處なり。コックの給金は食附にて月二十五弗より八十弗上等或者は百二三十弗を得べし。

ウェーター、これは即ち給仕人にして、些と躰裁も善く、且つ小取り廻はしの利く、機敏にして小才の利くものならば、これに當ることを得べし、最も樂な仕事なれば先づ月給もコックの半分位は得らる可きものなり。併し上等にてヘッドウェーターとならは月百弗の收入を得るは困難ならさるなり。

洗濯屋は、我日本人に在つても隨分各所に營業せるものなるが、これを實際に爲さんとす

るは可なれども、唯洗濯屋に奉公して居て、金は儲かるものに非れば、金を儲けて其れに依つて、事業を起さんとするは得難きなり。是れ金儲け以外に目的を有する者の爲すべきことにあらず。

次に百性―農業―勞働、これは太平洋海岸に於いては、到る處に在るものにして、其仕事は誰れにしても適せざることなしと雖も、唯哀む可きことには、言語の通ぜざるが爲めに、この勞働者たらんと欲せば必すしも親方に附いてこれに從はねばならんと云ふ一事にして、この親方と云へる多くは、日本のゴロツキ書生の爲せるものにて、其周旋に依つて金を取り活計をして居る處のものにして、最も西洋人に於いてもこれをなせり、其西洋人の日本の通辯が在つてこれに依つて其勞働者の周旋に當れるものなり、而して此の農業勞働は時節事業が多くして、所謂春さきにはイチゴを採るとか、或は晩夏初秋には葡萄其他の果物をむしると云ふ如き働きにして、これは左程の賃銀を得ること能はざるも、自ら經濟して、固くしてこれを守れば、金の些は殘らざるものに非ず、成る可くは自ら語學を學び得て、親方に行かずして農家の事業に從ふ樣なすことは最も必要なりとす、併しながら日本人にして本當の農家に働くと云ふことは殆んど到低出來るものに非ず、即牧蓄業には稍適するも彼の機械を使用して麥をまくとか苅除するとか云ふ如き大ひなる仕事には我邦人には適當せず、先づ適當なることは前へに云へる如く果物むしりの如き仕事を爲すが最も適當なるべければ、宜しく實直なる人の周旋により、これに從事して可なり。

今一は鐵道工事即ち土方と云ふ如きものたらんと欲せは、新開の地に到りて働くことを要す、其給料は一日の日當二圓五拾錢より三圓位のものなり、これに就いて新開の地に働かんとならば、最も健康なる身躰を具へたるものならずんば非ず、或は向ふへ行つて、働く目的の地に到つては、自炊をしてやると云ふ決心を以て、小さな小屋又は天幕を構へてこれに起居し、風雨を凌ぐと云ふ覺悟を以つて工事に働くことは大いに利益なるべし、又この鐵道工事をなさんと思へは、農事に就く如く、例へ日本人にせよ西洋人にもせよ、其親方に附かざるを得ざるなり。

扨て職業の撰定を如何なることに決めても、職業に就き得るとして、如何なる時に成切し得らるゝやと云ふ如き、一つの心得のあるあり、其れは如何なる仕事をするにも日本人として耐忍が乏しいが、この耐忍と云ふものを心に組みたて、永續すと云ふこと、即ち牛は千里を遠しとせずして歩むと云ふ樣に、奮發して、不折不屈に熱心に、而も除々として行

くと同時に、經濟と云ふ心が最も肝要なりとす、この經濟を重んずれば自然時間をも大切にする、時間を大切にすれば耐忍の必要を感ず、耐忍を感ずるの下には必ず成切は期して待つ可しと云ふも敢て虚言ならざることを吾人は信ずるものなり。

故にこの忍堪を重んじ、經濟を重んじて金を貯へ金を蓄ふることは就中必要にして若し金にして無ければ悲哀の境遇に陷るはこれ當然なるが故に、働けるの間は專心貯金に志すことを以て勉むへし、然るにこの貯金に就いて其人の大いに注意すべき一事は、其金を人を信じて其人に預けることでこれは最も危きことにして、又次には人に托して郵便局に預ける如きことなり、固より時間は大切なりと雖も、若し貯金を爲さんと欲する際には、例へ一日の損を見るとも、自ら行いて郵便局に預けることはこれ必要正當にして、隨分鐵道工事をして居るものが道の遠きを慮かり、人に托して貯金を爲さんとし人に詐かれたる例少からず、豈に一日休みし其賃銀を拾つるのみならんや、親方だりとも決して油斷すべきに非ず、必ずしも己れの肌身より放つことは爲す間じきことは、吾人は注意して止まず、若し米國に在つて金儲を爲す勞働者に其金なかりせば人にして人に非ず、人間たる待遇も受けざるのみか、畜生よりも酷たる目に逢ふは必然なりとす。

爰に移住者其人に注意したきとは、日曜のことにして、勞働者と雖も米に於いては其日曜には必ずしも之を休むを例とす、其の日曜を何う云ふ工合に費せば善きやと云ふに就いては、多くの人が誤まる處なりと雖も、先づ西洋人の如く或教會堂に到りて精神を休すめ、而して其道德、宗教と云ふ方に傾むいて信仰するのがこれ必要なり、即ち宗教を信じて居ると云ふことが米國に於ては一の信用となる、故に信用を得て而して立身せんと思はゞ、この精神的修養を怠ることは最も不可なりとす。

而して前説の如くして已に自れが職業を得てこれを勵み、最早其職業をも覺えたりと云ふ時に至りたらは、日本に歸らんと欲せばこれ亦難かしきことに非ず、唯金を作らへてこれを日本に送つて置けば足れり、或は米國に在つて業を營まんと欲せばこれ亦人物にもよれど難きに非ず貯金を以て資とし、例之行商人と成つて働くも左程困難に非ず、米國各州各郡一般に定日の市場が在るを以てこれに行つて商賣をするも必要にて、最も年の暮にクリスマス商人と云ふものは、隨分金を儲けるものなり、極々下等の街に在つてはスタンドを街頭に置き商賣するも隨分面白き金儲けなり、夫から資本家の店に這入つて儲けることも出來得べきなり併し米國に於いてこれ等のことをなすにも皆信用を專一とするが故に注意

して、米國人の得意を得ねばならざると共に、又一方には米國人が爲す所の、秘訣を覺ふることは餘程重きことゝ云ふ可きなり。

尙ほ人々はこれより進んで將來の目的が果して如何にせば可なるやと云ふ迄に於て、後章に說いて渡航者諸氏ためにこれを悉うせんと欲る而已。

上記の外に學生の仕事としてスクールボーイなる一種の日本人の仕事あり我邦の學生は多く之をなし學校に通ふ者あるも其成功せる者は頗る稀なりとす抑も此スクールボーイとは或る家族に住み込みて朝夕家事の助けをなし學校に通學する時間を得て學業を修むる者にて頗る善良なる仕事口なるも餘りに樂にして善過きる故に飽か來て耐忍し兼て此スクールボーイて學校を卒業する學生は極めてに稀して嘆げかわしきことなり要は耐忍なきが爲めに樂な仕事即ち千變一律同一の仕事を毎日〳〵怠らず盡す事か出來ずして渡米の大目的を達する能はさるなり耐忍とは艱難辛苦に堪へると云のみの意味にあらす我邦人には艱難辛苦に一時堪ゆるは決して難事にあらず彼の雨が降つても日が照つても日々同一樣の仕事をなして孜々刻々として進行し絕へ倦ます怠らず順々乎として平和の下に堪忍するは大器晚成の一大秘訣にしてスクールボーイの如きには最も必要なるに是を有するものなく終に失敗に陷る者比々皆是なり概してスクールボーイは好遇を受け親切に取り扱はるゝ者にして我學生の渡米者には至極適當するも如何にせん彼の耐忍なき故に失敗に終るはかへす〳〵も遺憾千萬の事なり渡米の學生諸氏大るに注意して此一大好事を忘れず利用すべきなりスクルボーイの口にても仕事か能く出來れは一週間二弗半より三弗半多きは七弗を得る敢て難事にあらす實に學生として渡米後從事するには至良至善の仕事なり之を爲には先づ困難辛苦して一通りの仕事を覺へて從事せは便利にして成功するや疑ひなかるべし只耐忍は最も必要なりとす。

# 第五章　學生渡米の心得

これより學生にして渡米せんと欲する人のために、些かこれを說に當つて、先づ我學生の渡米する中、大別し三種となして見做さん。

第一は政府より資金を出し、さうして或る學科を治むるの目的を持つて送らるゝものにして、即ち大學校の卒業生の如き、若しくは優等生にして米國に遊學し、一定の科業を治むるもの、所謂校費渡米生これなり。

第二は富豪家の子弟、或は高等官吏若くは豪商の息子にして、渡米して學科を治むるものにて、此種の學生は隨分在るものなり、無論、其父母關係者より學資を受けて勉強するものなるが故に、其身固より教育あり否教育なくも金力あるを以て、吾人が爰に喋々同意するの必要なきかと思ふを以て、敢て多辯を要せず。

第三は自費渡米學生、即ち自費を以て渡米し苦學するところの學生なり、これは詰り渡米するに當つて、其旅費位は父母或は親屬、或は友人間より得て、然うして米國に渡航するを得て、先づ何か適當なる事業をなし、傍ら學事を治め、若しくは工業を治めんとして往く所のものにして、渡米學生の中に在つて、而もこの種の學生は就中多きに居ると謂つて可なり、吾人が學生の渡米案内を草するに當つては、この種の學生のために、爰に注意を與へ、忠告をなし、且つは其便利を謀らんと欲するものなることを知れ。

先づ第一に渡米者の決心が最も必要にて、學生としてはこの決心は大いに缺ぐ可からざるものなり、又如何なる種類の學生が渡米をなして宜しきやと云ふ問題に至つては、第二に身躰の點にて何よりも最も注意し且つ心得を要すべきところのものにして、この身躰にして若し强壯に非ざれば、渡米して事業を得、而して勉學せんとするも、寔に困難なることと云はざるを得ず、これ身躰が貧乏せるものと云ふ可し、所謂貧乏書生とは衣食を缺げるものに非ずして、身躰の薄弱にして事業も出來ず勉强も出來ずと云ふ如きもの、これ眞に貧乏書生と云ふ可きものならん、若し身躰の不健全なるものが、强いて渡米をなし事を爲さんと欲せば、これ死に就くが爲めに進んで行くに似たり、故に此身にして健康ならずんば、例え如何なる目的を以て、如何に猛き精神を以て事業を學んと欲するも、充分なる融通が利かずんば、自活の目的は立たざるべく、自活の途立たずんば即ちこれ其勉强は望むべくして、而も果すこと能はざるは必然なり、今病氣に就いて之を謂はんに、胃病の如きは可し、例え胃弱なりとも、米國に行いて自活のために働き、且つ食物の如きも良きものを味ふこと故に、自然に治癒するに至る可しと雖も、彼の心臟病、或は肺病のある人ならんには、到底米國に往いて、如何に思想を貫かんと欲するも、得て望む可からず、日本人にして肺病の如き恐る可き病を持てるものにして、米國に行かば死ぬることの覺悟を以て往ずんはあらざるが故に、これ等の病ある人は能く考へずんばあらず、脚氣病の如きは決して患ふるに足らず、米國に至れは脚氣の起る氣間いはあらざるが故に、されど唯吳々も注告する處は我日本人の渡米せしものにして、而も肺病の徵候を有せしものは、皆後

悔せると云ふことに就いて、能く注意を欲するのみ、又惱病も然りとす、若し一朝病魔の激動するに逢はゞ如何、よし豪家の息子は病院に入つて、國手名醫の診察を乞ふことを得るも、自ら働いて自ら食い、自ら汗血を流して自ら己が精神の修養に勉めんと欲する自活書生は、如何にして入院すべきか、如何にして名醫のために診察を乞はんか誰か一盃の水を與ふるものぞ、況んや我病を醫する一盃の藥をや、右を顧りみるも父母在さず、左を顧りみるとも兄妹見へず、何を以つてか病を癒し、何を以てか我心を慰めん、空しく異鄉の煙となり、抱きし理想も果敢なく失せて跟をだも止めざるに至るあらば、却つて鄉里に哀みの聲を起さしむるの悲境に陷らん、宜しく注意して常に養生を怠らず、これ等の惡魔に侵されざるの要鎭に勉め、身を全ふし筋骨を健にし、而して後渡米に志さば、平素の志しを果すや、難からざる而已。

今身躰上の經歷は如何んと云ふことに就いて述べんに、先づ可成的働きを爲せしもの、勞働者の如きが、渡米して必ず成功を來せしもの〻多きに依れば、謂はゞ幼年の時代より勞働に慣れるもの、或は牛乳配達を爲せしもの、或は新聞配達を爲せしもの、或は丁稚小僧たりしと云ふ如きものは、これ最も適當にして、彼の田舍に於ける少し財產ある息子の如きが、其故鄉より資本を得て勉强を名とし、東京に來り、勉むるに非ず勉めざるにも非ず運動もなすなくして遊べるもの〻如きが、渡米せば必ず其の苦みに堪へ能はざるものたるや疑ひなし、爰を以て若し日本に在つて自營自活、困苦の中に其身躰を鍛ひしものならば、これ米國に至つて百難に打勝ち、遂に成功を全ふするものと云ふ可し、此點に至つては、如何程清潔なる家屋に起居し、身に綾羅を纏ふて寒暖の障りもなく、口に美味を味ふて其苦を知らざるものに在つては、決して爲し能はず、却つて自營自活以て苦學を爲せしもの〻能くする處なり。

次に精神の資格、即ち何ふ云ふ性質を以て居る人が善きやと云はゞ、先づ實直を事とする人をば最上とすべし、何處とても敢て異なる處なしと雖も、特に米國に在つては實直なるものならば決して用ひられざるなし、所謂實直にして正義を守り、一點曇り氣なき疑ひを容れんと欲するも疑ふ可らざる人を愛するものにして、且又かげ、ひなたなきものを愛す、即ち己れの氣に入れば言を謂ふも、若し氣に叶はざること在れは、口を開いて言を謂はざると云ふ如きものは、米國人の大ひに嫌忌するところにして、表裏なき人、順直なる人、機敏なる人を愛しこれを好むが故に、若し然る技量なき人は、能くこれを養ふことは、

渡米準備の一たらん。

日本に在つても又何處に在つても皆然りと雖も、米國に在つて、失敗し、失望し、身を壞り、志を破る處のものは、これ秀才なるものとす、才に富めるものは必す一の耐忍を缺くが故に遂ひに其方針を誤るものにして、これに反し、自ら汲々として働き、以て餘暇に勉強せんと孜々たる學生の落附いて撞著として、而も秀才の眼を以てすれば、恰も牛行に似て遲々たるものゝ、却て成功を來す所以んは、即ちこれ忍耐あるが爲めに他ならず、爰を以て渡米し苦學せんと欲する學生の、其資格は何を以て苦學し能ふ資格と爲すべきやと云ふに當て、一言以て之を覆へけ忍耐の一句に外ならざらん、元より躰格可なるも精神に全きも、この忍耐てう一事にして缺かば、其健全なる身躰の要求する處、其實直なる精神の希望する處、遂に彼岸に達する能はすして、空しく靈肉ともに失望の岸に逆行せん、忍耐は我が身躰の要求を充し得べき嗜好のものなり、忍耐は我精神の希望を達せしむ可きの軌道なり、この嗜好のものを味はず、この軌道に轉せずして、これを捨てこれを壞らば、何を以てか人生の目的を果し得きか、吾人はこの忍耐を舍いて他に自己の目的を果さんと欲するも、其途を知らざる爲り、或は秀才なるものは、一時己が才に任せて突飛に好果を握るも、其位置を保つ能はず、其れに安んずる能はず、即ち忍耐なきが爲めに其心動き、其氣亂れて、遂に隋落の境に陷いるや必せり、所謂忍耐は事業家の資本にして、勉學家の學資とも云ふを得べし、

然らは忍耐とは何んぞ、讀んで字の如しと雖も、所謂困苦艱難なる、激烈なる仕事、非常なる惡き境遇、これ等に處して、これを忍び耐へるものこれ忍耐か、否決してこれをのみ以て耐忍とは謂はず、固より此は普通常人の考ふるところ皆然らんも、吾人が爰に渡米者に取つて耐忍と稱するものは、此くの如きのみに非ずして、長く永遠に繼續して往くところの忍耐即ちこれ也、吾人は知る日本人の忍耐は、如何なる困難辛苦の中に處してもこれを耐へ忍ふの力あることを、左れど支那人の如く樂み輙き仕事を永邊に氣長く、倦まず厭かずして仕果ふせると云ふ點に至つて、實に支那人に一歩を讓らざることを得す、故に日本人としてはこの困苦の業に耐へ得ると俱に、樂事にも耐へて永遠にこれを甘んじて行く、精神的修養を是れ養成せずんば非ざることを勸告して止まずる也。

加之ず吾人が勸めんと欲することは、米國に至つて成功を遂ぐるに向て、其實直なる精神の必要なることは前きに云へるところなるが、其宗教心を養成し、宗教思想の存る人を以

つて、最も可しとす、何んとなれは宗教と云へばこれ道德の偕なうところにして、宗教心ある人は即ちこれ道德を重んずる人たればなり、故に歐米諸國に在つて事業を爲し、信用を得て、特に學生にして自營自活、以て勉學せんと欲するものは、必ずこの宗教を研究し、宗教に依つて其靈を養ひ其肉を安んじ、其の道德心を以て廣く交際と信用を得ることは、恰も黄鳥の梅花に於ける如く、これにじて完き精神を具ふるものとして待遇せらるべく、理想の麗はしきは其人の美しきことを表彰するものなることを忘る可らざる也。

既に吾人が身躰、精神上の肉躰と倶に相應し得たならば、爰に米國に行くに當つて如何にして住く可きやは、記者の前へに說くところの心得を以つてせば足れり、又渡米後自活するところの事業の範圍、即ち自ら當るべき仕事の種類に於いても、前へに委細說くところに違ふことなし、然れ共大躰に於いて其方針とするところは皆無くんば非ず、第一如何んがするかと謂はゞ、先づ金を儲け得て其れを以て勉强すると云ふこれなり、然れ共其は金を儲けると謂ふと雖も、往いて大學校卒業を遂ぐる迄の用意を調へるの意味に非ず、先づ往いて何か一つの事業を要め、所謂金を儲け得るの財源を作るものにして、其覺ふるところの事業が即金となり資本と成り、自活自營の基と成つて、已れが好む所に就ひて學ぶこ

とを得るに至るものなり、併し乍らその國狀に通じ、一事業を覺へ、米人に信用を得て、金をも儲け得る樣になるには、兎に角も二三年を要するなる可し、先づ夫れだけの準備を整へば、些かの資本も貯蓄せられ、爰に於いて好む處の學校に入學すべくして、遂に卒業も爲さるゝ可く、例へ入校して後も別に小使の些か位のとは、自然豫算の中より出づるとに至る可し、これ即ち一つの方法として、これに依つて耐忍を守り强勉をせば可ならん。

次の方法はこれ、前章に於て說明したるスクールボーイ、即ち家事に働き、通學爲すところの者にして、先朝早く起て家事の用を働き、八時頃より學校に往いて得るところあり、午後三時に歸宅し、其れより夕食の仕度を手傳ひ、或は家事萬端の用を助け、午後七八時より自由を得て、已れが晝間學校に往いて學ひし所を復習することを得べし、故にこれにして耐忍せば、其家に在つて養はれ、些少の小使は給せらるゝと云ふ有樣なるを以て、大いに便利なり、然れど其かはりとして、永遠に働かずんばあらず、何ぜなれば、このスクールボーイは然程苦しき業ならざるを以て、亦然程金儲けをなすこと能はざればなり、今謂へる如く八時より三時迄學校に赴き、夜は八時より自由の身を得と云ふ有樣なれば、其業の容易なることは以て知るべきなるが故に、永遠に堪忍して其れを遂ぐることに勉め、

所謂何時迄も人に介せられて苦むと云ふ精神を以つてせば、即ち足りなん、先づこれは一般躰力なきところのものゝ多くが、斯かるところに在つて、自己の目的を遂げ果すには好都合たらんことを信ずるもの也。

此他に於いて種々の方法あれども、先づはこの二つを以て恰當と云ふ可し、一般より謂へばスクールボーイも、他の勞働者と爲りて働けるものと雖も、何れに於いても、小學校より中學校に進み、中學校より大學校に進みて遂に大學校を卒業するだけの道は、確かに設けられたるを以て、果ては學位をも授かることは敢て難かしきことにあらず、唯己れの勉強次第にして、通常の人間にして、堪忍を以つてせば、自己目的の彼岸に達することは得て待つ可く、豈に一文の金なきがため、否資本なきがために渡米して事業を果し得ざるの所以あらんや、所謂夫れだけの組織の設けられつるものと云ふ可きなり、故にこれ等自活の書生は甚だ多きを以て敢て珍しきことなし、然れど堪忍なきものゝ成功を見ざることの多きは實に歎ずべきなりとす。

爰に於いてか米國に渡航移住し、以て勉強せんと欲する學生諸氏に在つては、種々なる目的を具へ、其目的のためは萬里の波濤を蹴つて異郷の空に、慣れ染まざる天地の中に、風俗言語皆な異なる間に、前途の險阻永遠なる上に、これを意とせずこれを介せずして進むの勇氣は、如何なる目的のために、身を犧してこれに當るべきや、これ個人の定めて往くところなるべし、中就吾人の見聞するところを以てすれば、政治法律若くは文學の研究を以てするもの、最も多きを見る、是等は本より美は美なり、壯は壯なりと雖も、而も米國に在つて成切し學位を得て國に歸ると雖も、其用少しと云はざるを得ず、亦これを學ぶに困難なるにあらざるも、先づ法律の如きに就て謂はゞ、米國に於いて卒業し來るも、我專門學校、或は明治法律學校、或は和佛法律學校等の生徒と同じく、判檢事の試驗を受けずんば、決して法律の用は利かざるが故に、寧ろ米國に往いてこれを學ばざるも、我國の學校に就いて卒業を爲すことは大いに便利なりと云ふ可し、政治家たらんと欲するも亦同じ、これ等は自活書生の到底及ぶところに非ず、政治家となり、一つ政界に立つて目覺ましきことを爲さんと欲して、如何に志は動くと雖も、而も手足となる可き資本即金なくしては、其志想を伸ばして己れの想思を行ふことは及ふ可くもあらざるが故に、これ等は自活書生として學ばざる方が、却つて處世の方針上可ならんことを信ず、然らば何をか宜しとならば、醫學を研究して醫者となるは最も適當ならん、米國の人も日本の人も或は印度の人も、

其身躰の組織に異なるところなし、故に米國に於いて卒業せしものは直ちに日本に歸つて醫術開業するに差し閊へなく困難なることなく、法律家の如く試驗を要せざるが故に醫術に關することならば、眼科にせよ齒科にもせよ、或は耳鼻咽喉科にもせよ、內科も外科も皆何れにても學んで差閊なからん、凡そ實際に關した學問に至つては、米國に於いても出來得るのみならず、一般に進歩せるが故に學ふことの便利にして且つ必要なるを以て、百性農業家としても普通學校に於いて治むることを得るが故に、農學校などに這入ることは便利ならんことを知る、爰を以て渡米せんと欲する學生諸氏は法律を學ばんと欲せば再び日本に於いて受驗を要することを心得、政治を學ばんと欲するものは、其資本を要するが故に、自活書生には不便なることを心得、先づ醫術及都て科學技術に關することは、何れにしても日本に歸つて應用し得らるゝことを心得、農學を治むることは不便に非ずしてこれ亦必要なることを心得、而して後其目的を擇び各自欲するところを學んで可なり。

爰に學生として交際上心得べきことは、第一時期を缺かざること、即ち約束を違へざることとこれなり、先づ學生の身として自ら働ける間は、決して此時間を間違へざるに志すことを忘れざることに勉め、夫れより精神的修養を怠らざることにして、例之己れは宗教家たらざるも、教宗を信じ、日曜には必ず自ら會堂に至つて禮拜を行ふと云ふ如く、立派なる米國人の爲す如く、己れもこれに習ふて爲すことは必要なりとす、謂はゞ米國に於いてクリスチヤンゝ基督教徒にあらずと云ふことは、即之れ信用なしと云ふ看板を掲示せるものと同一にして、用られざるの基となるが故に、宗教を信じ精神的修養を怠らざることを勤むべし。

猶學生が、所謂自活するところの學生として、一ッ心得可きことは、新島襄が米國に於いて外人の土足にかけられ、辱かしめられつる時に際し、我はこれ神州の男子、咄外夷何爲るものぞと奮起して、今や日本刀を閃かさんとせし一刹那、いや待て、我はこれ大望を抱いて萬里の外に呻吟するもの、例之彼れを切ればとて、我功立つものに非ず、匹夫一人を倒して一生を誤まるは愚の至りなりと、自ら其耻辱、其切齒慷慨の涙んだを呑んで、其燃え上る怒り炎を靜めし大度量、其大度量は後年京都に於て同志社大學を創設するの美舉光榮と成つて、新島襄の名を殘すに至れり、これこの忍堪、これこの度量、此は米國に往いて自活し、事業の成功を見んと欲するものに在つて、決し免かる可らざるものと云ふ可し、我れはこれ神州の男兒なり、我は日本魂を以て作られたる身躰なり、我は士族の流れなり

と威張つて見たところで決して米國に於いて成功を見るものに非ず、米國に於いて働けば或は足を以つて敎へらるゝこともあらん、これ何も米國に在りて珍らしきことに非ず、習慣なる故に米國人の女とても同しく足を以つて指揮すべし、然ればとて其れ等に腹を立てると云ふことなれは、爲すことすること皆、立腹の基となるが故に、この點は日本人と同樣なる考へを以て交際しやうと云ふ譯には行かぬことゝ覺悟せざる可らず、其覺悟を以つて米國人よりも尙高き理想を有ち、天下に耻ぢざるところの卓拔なる大目的を以て、精神上の修養を怠らずんば、飯炊きを爲すも可、庭掃きをするも可、雪隱の掃除を爲すも可、風呂場の淸めをするも可、例ひ罵られ土足に蹴けらるゝとも可。我は目的のために奴隷たり、目的を果さんがために自活を求めんがために人に奴たり、然れども我が目的を果すの日は、即ち奴隷に非ずして、神州の男兒、我は最後に彼れよりも猶高き位置に立たん、我は勝利を占らるものなりてふ、天下に耻づることなき理想を以て進まば、何の怒るところかあらん、何の耻づるところかあらん、其天下に耻ぢざる志を以つて、賤しき業を爲すはこれ却つて美なり、米國人も人なり日本人も人なり、此間何の隔離かあらん、米國人は却つて心にこれを稱贊せん、大學校に學ぶところのものにして、賤しきしごとを爲て、夫れにして忍耐するの有樣を見ば、必ずしもこれを感じこれを稱贊せずして止まんや、猿面藤吉何時迄も猿面藤吉に非ず、終りに於ける勝利を忘る可らざることを知覺せよ。

終りに臨んで吾人が、其自活書生同胞のために勸む、日本に於いて苦しき勉强したいと云ふ希望あるものは、宜しく米國に行け、汝等のため、日本のため、社會のため、人類のためなり、日本は未た小國なるが故に、志想ある學生を待遇することを知らざるなり、勉强せんと欲すれは必ず米國に行け、記者が前へに述ぶるところの理想を以つて進まば、學生諸氏のために學ふ可き道は開けり、記者が勸めた一人は、既にこれを爲し果たせり、記者自ら保證するところなるが故に、諸氏敢て躊躇を要せず、米國は貧にして資本なきものと雖も、理想の高くして勉强したしと云ふものゝためには、大ひなる同情を持てり、ローグキャビンに生れ、靴磨きを爲せる人、今日大臣となれり、往け學生諸氏、往け苦學を好む人、米國は諸氏のために攻學の道を開けり、米國は諸氏のために大ひなる同情を表せり、臆するに足らず、患ふるに足らず、唯說者が說くところの注告にして容れ、記者が勸むるところを理想とし、氣焰万丈、最後の勝利を希圖せよ。

# 第六章　商工業者の渡米

我日本は維新以來近年、商工業は日々に進み、少しは見る可きものあるに至れり、然るに我國に於ける其製作品は何處に向つて多く輸出せらるゝやを思へば、即ちこれ米國にして、我國と米國との關係は維新の始めより今日に在つて依然として保たれ、其日米間の商工業は益々關繫の親密に至りつゝあることは實に明かなり、然るにこの日米間の商工業と云ふものは、其多くは米國人の手に非ずんばこれ英國人の手に依りて行はれつゝあり、爰を以て日本人としては米人と直接にこの取引きを爲す能はざるの形狀あるは實に遺憾も餘りありと云ふ可し。

若しこの日本に於ける商工業を振起せしめ、外國人に依らずして、而も日本人の手に依りて直接に其が取引きを爲さんと志さゝば、如何にするも米國の地理に通じ、其國の狀況人情に通じ、將た商工業上の狀態を知悉し、明通せざるべからず斯して、商業に從事するとは、我日本人として大いに力を盡すべきところのことのみならず、彼の米國は商工業上便利なるの地にして、亦滊船の便利も甚だ宜しと云ふ可く、或は米國に渡つて其實業家にして友人を求めんと欲せば、澤山なる實業家の友人を得べければ、宜しく米國人と親んで行くと云ふことは、これ今日の急務たらんことを信ず、若し日本人商人がこれを冷視し、意に介せずとならば、これ歐米人に日本の商權を一任し、これが總裁たらしめ、日本人自ら職工の位置に安んじ、丁稚小僧を以て甘んじ、以て嘻々たるものと何の異なる處かあらん、然れ共これに反し、日本に於ける商工業を益發達せしめ、これを進歩に導くに從つて、是非渡米の必要あることは前きに言へる如くなるを以て、一度米國に渡りなば、彼地の商工業上の智識を得て、我れに於いての商工業上に進歩を來すことは論を俟たざるなり。

然らば其商工業家が將に渡米するに當つて、如何なる準備を爲れば善きやと云ふに至つて、これは彼の伊勢參宮をするとか、或は金昆羅詣でをするとか云ふ如きことゝは大いに異なれり、先づ今日の商工業家は渡米せんと云ふに當つて、或は言語が解らんから可んとか、彼方の事情が分らんとかを以て、其往く可き暇を空しく費やせり、其れのみならず、米國としも謂へば遠方の國の如く考へ、渡航することは餘程困難なることの如く思へるもの皆それなり、恰も僻陬に住める田夫野孃の、東京に行くとしも云へば、再び逢ふことの期し難きかの考へを想像するが如しと雖も、所謂チームにして、大いに間違いなる考へと

云ふ可く、決して此くの如き心配は無用なりとす、彼の地に到れば我日本人は夥多行いて住へり、例へ己れは英語に通ぜざるも、其の商館に到れば商館に日本の通辯あり、其官舍に到れは亦日本の通辯あり、何そ用の缺ぐることかあらん、故に渡米せんと欲するの準備として、斯かる心配を爲すは却つて、不必要なりと謂ふも可なり、宜しく志ある人、自ら進んでこれを爲すは、唯り自己の利益のみに止まらざらん。

又米國に渡航せんとするに當つて、其手數を省き其便利を圖らんとせ欲せば、先づ願つて旅行券を得たるの後、横濱のブラウン會社支店に至り、旅行切符を買ふ、本よりこの會社は、萬國漫遊案内をなす所なるをもつて、このブラウン會社於いて切符を購へば、即ち滊車に乘り、船に乘り、旅宿に投じ、或は畫食を濟す等一切必用上のもの、總て其購ひし切符に依つて其用を調ふ自由を得べし、所謂横濱に於いて一切の入費を拂ひ込まば、米國に至つて例え金は一厘だも拂えざるも、不自由なく働作を得べき、實に便利なる方法を設けられたりと云ふ可し。

以上説く處により其準備を得て、將に渡米せんとすれば如何なる資格を以てせは善きや、謂ふ迄もなしと雖も、所謂日本に於ける商工業家と云ふ資格を以て、大るに自重して行くことが最も必要なりと吾人は信ずるものなり、故に米國に至れば、先つ其國狀を察しこれを我國の國狀と比想し、又米國に於ける商業は如何なる有樣なるか、其工業は如何なる基礎を以て如何に盛大に製作されつゝあるか、其商業の機密、其工業の働作を觀察し、爰に至つて大いに得る所あり、これを參酌して取引きを爲さんとするの覺悟を以て往かざるを得ず、其時日は短くとも三ヶ月、或は半ヶ年、長くとも壹ヶ年位滯在して可なり、而して長く滯在するよりは寧ろ短くして度々往いて、其の取引をするは大ひに可しと云ふ可し、或は度々行くは入費の用多きが如く考へらるゝと雖も、決して不經濟なるものに非ず、其往復毎に必ず利益を得べし、即ち一度往いて一事物を覺へ、二度往いて又一事を覺へ、而して往く毎に利益を得て歸れば、其中より入費は皆支辨し得らる可し、世の中の商人は利益を舍いて爲すべきに非ざれば、其渡米の必要を看認め、其上自ら重んじて往くことを望む。本より此くの如きは、吾人の口より述ぶるを待たずして、商工業家の自ら知る處ならんが故に敢へて縷々これを陳ぜず、唯願くは宜しく渡航して日本の商工業をして唯外人の手に依賴せず、丁稚小僧的根性を捨てゝ眼を高きに附け、心を濶ふして、大ひにこれが發達を期し、これが進歩を謀るに勉めんことを勸誘するのみ。

# 第七章　著者在米の經驗

余は今茲に余か在米中の經驗殊に今後我愛する青年渡米者諸氏の參考にもなるべき經驗を記さんとす、抑も余は天性愚鈍にして他人の如く活潑なる擧動に出づる能はず故に在米十三年間の長き年月中に之れぞと云ふ經驗而も諸君に向つて誇るものなく其平々凡々にして語るを耻づる者のみなり余は才能なく又或る人の如く勇壯の氣なき故に冒險的行爲に出し事なし故に我讀者をして壯快の感を惹起せしむるの程の事は更になし只十三年間孜々戢業に甘んじて大學校と神學校を卒業して三種の學位を得たるまでにて、此外に爲す所なき無味淡白たる生活なりき然とも余が敢て諸氏即ち渡米を欲せらる諸氏に告けんと欲する所以のものは他なし余か米國に行きて期望より素志よりも大なる學業と經驗を得たること是れなり是れ米國の社會組織の然らしむる所なりと雖も抑も亦米國人の親切なるが爲め、其度量の廣きが爲めなり余が如きものも米國人が受くる所の高等教育を受くるを得たるは余の彼國に對して感謝に堪へさる所なり余は信ず余の如き資力なく學殖なく才能なき青年も米國に行かば其の期望以上の志望を達して歸ることを得るを況んや其才學識達有爲の渡米者青年に於てをや其功成りて歸期せらること余の信じて疑はざる所なり是れ余か今日の學生諸氏の中學資に乏しき青年諸氏か一日も早く斷然起つて渡米せられんことを望む所以なり余は歸後常に青年諸氏の渡米を奬勵したり而して其結果は卷末の來翰に依つて見らるゝ如く余の見解の誤らさりしを彼の在米諸氏と其父兄と共に喜ぶ所の者なり然り而して今後渡米を企圖せらるゝ青年諸氏亦其必ず成功することは余の斷じて疑はざる所なり。

余か渡米せしは明治十七年の十月の事なりき、余は其節無一物の貧生なりき如何なる原因か余をして渡米を思ひ立たしめしや曰く明らさまに云へは二つあり　一は余は明治十四年の夏東京に出て或は活版屋の車廻しとなり文撰の子僧となり種々艱難の末岡鹿門先生の漢學塾に入り塾僕となり漢籍を學ふ二年後野州藤岡の森歐村先生の許に同じく漢書を學ぶも愚純にして詩文を以ては生活の道を立つる能はず進退實に究するの餘此に出でたると其二は數月前に渡米せし學友岩崎清吉なる人が桑港の況狀を報じて「米國は貧書生も學問の出來る國なり」と云ふ一信是なりとす、扨余が渡米の船賃は十數人の友人の出金を以て僅かに行季を整へたり衣服は友人か芝の日蔭町にて古服を買ひ求めて吳れ其不足の船賃は一の同船者に借りて出帆せり。航日十九日にして桑港に着したり上陸の時所持せし者は二十圓

の借金（船賃に向つて）と正金はメキシコ弗（米貨六十仙）一個なりき。

同船者は九名にして皆英學の出來る人々なりき余はA、B、C、も碌々に知らず他の諸氏は金錢もあり教育もあり加之に桑港に友人もありき余は一人の友人もなく一本の添書をも有せず彼の學友岩崎は遠く紐育州ポーキピシーに在りたる故余は孤立扶けなき者なりき始め他の同航者と共にクレ街の日本美以ミッションに行き扼介になりたり一二週間の間日々慶庵即ち雇人口入所に行き腰を掛けて働き口を得んとせり然るに余は英語か出來ざる故に幾日立つも更に余を雇ふ者なし殆んと二週間斗り雇人口入所に侍ち居たるに其主人は余が啞の如く毎日々々に働口を得んとして待つを不憫に思ひ一の位置を與へたり是れ明治十七年十二月廿日頃の事なりき余は或る人の通辯を以て一婦人に子一人と一保母都合三人家族にして二階住居の内に一週間二弗五十錢で働きたり是れ余か米國にて自活を爲し始めたる時なりとす。

此家の保母は實に親切なる婦人にして啞同然の余に種々なる事を敎へて余を使へり余は此内にある事三四週間にして余か雇はれし家族下階の家に雇はれし一日本人あり田中鶴吉とか云へり此人は種々の甘言を以て余を去らしめ後とへ自己の友人を往込ませしことは余か後日に於て漸く知り得たるか如き愚を示したり因に記す此田中鶴吉なる者他日余を訪問せしことあり予は其鐵面皮なるに驚きたり余は當時月十五弗を以に善良なる家庭に働き居れり扨余は余の米國に於ける勞働の小學校を尙早に而も經卒に退校して始めて離業者となれり而して再び美以敎會に來り一時住食せしに一週斗りすると當會の賄方は頻りに食泊料の催促をなせり余は前日中儲けたる金は上陸當時の食料に支拂ひたる故今や無一物なり故に此マイザル的催促に堪へ兼ね或る勞働者の會に行き會長千葉某に依りて金五弗を借り受け支拂を濟して美以敎會にグードバイを告げ全く桑港ゴロッキ社會仲間に入りたり。

扨數日此會に出入して働き口を尋ね一二の所に行くも追ひ出され今や一錢の蓄へなく饑餓を感じ止なく十錢を或る人に借りてパンを買ふて食したり幸に一週間三弗の所に行き働くこと三日目に不幸にも一種の熱病にかゝり生死覺束なきかと思意せり蓋し余か耶蘇の神を求めたるは此夜病床にありし時を以て始めとなす翌朝は働き得ずして辭し去り又路頭に迷ひ困難の極度に達したるなり余は此時に始めて悟れり、爾後は充分成算なくは如何に困難なる働き口も去るべからす如何に仕事が六ヶ敷も主人が不親切なるも殘酷なるも自己生活の成算なくは斷じて現在の地位を捨るべからずと是れ余か此の困難に依つて得たる定見に

して在米十三年間確守せし所にして之か爲めに當初の如く口糊に道なく饑餓に迫まられたることなし又此經驗は余に耐忍の必要を敎へたり而して余は此敎を守り得たり余か在米の殘年は只此耐忍の在る有りしか爲めに自ら立てし方針を遂行するを得たるなり。

金十錢のパンは尙ほよく余が命を二日間支へたるも借食は繼續すべからず余は一ヶ月十弗で桑港より四十英里あるサンラフェールと云ふ一小村の家塾の皿洗掃除番兼給事人となりて行けり一人の先生（獨身者）と一人の助敎に十數人の生徒ありたり讀者は余か此の塾に入りたるを仕合と思ふ者もあらんが大に然らず此塾のメトルン、兼下女及クックなるギンナンと云へる五十斗の婦人は實に余を奴隷の如く酷役したる婦人なり朝は五時前に呼起し夜は八時迄絶へ間なく勞働なさしめたり口の惡きことは無告の愚民を責むる惡役吏よりも酷にして非理なり余は毎朝朝飯の用意をなし當校舍の掃除點火（冬なりし故に）をなし尙ほ學生の寢床を整へ歸つて朝飯のウエーターをなし終つて皿洗ひ掃除洗濯をなす一分間の休息時間なし余は今に彼の無情無慈なる惡魔を以て滿されたるギンナン酷婦を心の眼前に呼ひ起すを得て余か惰眠を醒すことあり思ふてギンナン婦に至る毎に戰慄せさることなし余は爾後此時よりも遙かに困難なる激烈なる勞働をなしたることとあり然れとも此家に於ての如く酸酷に且つ手急しく使役されたることとなし余は此處に働く二ヶ月にして再び桑港に歸りたり。

歸桑して慶庵に行けば一週間三弗半の働き口あり此れ桑港下町の片端にして大工の老棟領の家にてアイリン人の家族なりき此家族は富めるにあらさるも安樂に暮せる內にて余に對しては實に親切なる家なりき被の鬼婆に使れたる後なるが故か余は此家に滿足して八ヶ月間勞働して渡米の際借金したる金額を悉皆支拂尙一枚の古服を求めたり然るに此時は同船者にして余が渡米當時は少からざる盡力に與りたる余の債主矢野美造なる人の望みに應じ彼を大工の內に住込ませて余は再ひ五六十英里あるポノマと云へる宿屋兼酒屋へ雇はれて行きたり一ヶ月二十弗の給金にて勞働の激急なるはサンラフェールに劣らざるも身躰は强健にて多少の經驗を有せし故に左程の苦痛を感せざりき此宿屋は山中にありてハンタースの遊獵の往復時に止宿する爲めに設けられたる者にして二三の農家の外は全く山間僻地なりとす二ヶ月斗りすると前記矢野美造なる者より報じて歸國する故面會したしと故に余は此家を辭して歸桑し同人の歸國を送りたり此送別の際余は矢野に米貨六十弗を依托したり內三十弗は氏歸國に入用なりとて貸し與へ殘る三十弗は余か貧乏なる國の老母へ送り呉れ

らるゝ樣懇々依賴せり然るに此人は横濱より安着の一片ハガキを送るのみ亦一信なく該金六十弗と共に行衛知れずとなりたり余は金六十弗は惜まず此人が斯くまで不德に墮落し果たるを惜しむ又余の老母に送りたる三十弗の屆かざりしは實に百年の遺恨なりとす此余が失敗第一の經驗なり此外は十五弗を在桑人下野の出生新井某に貸し遂に取られたり併し此數十の金は余に貴重なる一事を敎へたり他なし余は爾後日本人と交際せざるの良策なることを殊に金錢上に於ては決して何人とも關係を有せさることなりと之か爲めに余は却て多くの良友を得たるも余は常に孤獨の土地に行き又學問するを勤めたり。

矢野美造を送り余は桑港二三の家に働きたるも思はしからず去つてアラメダに行きプラムマー氏に月二十弗にて働き殆んと一ケ年繼續し後同地のマコレーン醫士の內に働く年餘其間宗敎家の夜學校に入り日曜日に敎會に行く機會を得遂に耶蘇信徒となるを得たり後ちチークランド市にあるホプキンスアカデミーなる學校に學びたり是れ實に千八百八十七年我明治二十年なりとす。

余始めは金を儲て然る後勉學に從事せんと望みしも三ケ年間の後學校に入りたり爾後十年間仕事をなしつゝ勉强をなし二年半中學に三年間大學に在りて卒業し三年間神學校に學び其夏季休暇は勞働をなして錢を作り只一夏三月間英國に遊ひ他は歸途（明治二十八年暮）に附くまて勞働を爲したり（余は明治廿九年春時歸國せり）此十年間の勞働と經驗は余に取りては實に大切なるも余は今日諸氏に語るを欲せず如何となれは此時代は余に取りて先づ渡米の成功時代にして將來渡米諸氏か各自經驗もて知られんことを渴望する故なり米國に在りては大學の生活程快樂なるものあらず乞ふ渡米諸氏自ら經驗せよ。

## 第八章　渡米せる苦學生の最近書幹

冀望ある青年は、自然と其の抱負が書翰の間へも見はれ來るものなり、著者は渡米中の苦學生より送くり來たれる最近數面の手紙を存し置きたるにより玆に之を掲載すべし、如何に彼等の青年が異境にありて刻苦し異土の人情風物に接して如何なる感懷を有せるか、果た此等の辛酸を嘗め勞働者の地にありても胸中には猶ほ高尙なる精神と偉大なる冀望を蓄へつゝあるかを知るも興あるべし、然れども餘白少くして全文を掲載する能はず其大要を掲ぐることとせり、而して此の數通の書翰以外にも幾多の青年の通信あれど一一掲ぐる能はざるにより若し一讀せんと思はるゝ諸君は著者の許に來りて自由に閲覽せらるべし。

## 醫學生　宍戸氏の書翰

嚴寒の候彌々御壯健にて國家の爲め御盡力有らせられ候段此上もなく喜ばしく存候、一昨御送付下され候勞働世界拜讀仕り今夜も夜半の鐘聲を聞くまで繙き候云云

これより專心會話筆記等勉强致すべく苦心罷在候、最も時間少く、資力なく、如何にかして一歩を進め充分なる修學の位置を得可きかと汲々罷在候實に先生が多年苦學遊ばされ候歴史は小生に取りて此上なき良藥と存じ大に憤勵致居候

當地の日本人等は、小生か餘りに貧窮の境遇に陷れるを見て寧ろ斷然歸國して家業を扶くるを得策ならんと勸むる者もあり、先日も或法學士は近日日本に歸國致すべきにより何か用向あらばとて夫等の意味を含めて尋ねられしも有之候、然し何れにても一業に達せざれば決して歸國せずと決心致居候、殊に病院の組織醫者として社會に於ける位置及本分等此等の醫學的研究はやゝ比較的に得る所これあり候、當國に施行せらるゝ勞働者の疾病保護勞働者の之に對する責務、不具者養育、或は感化院（日本とはやゝ異れり）等に對する醫者の關係等時々研究致居候云云、昨夜歸途勞働組合の事務員を訪ふて先生の勞働世界のことを話せしに、日本の社會も斯く迄進歩せりとは思はざりしとて案外の樣子之あり候云云、小生外國に渡航し初より腦中に片時も日本、日本、我國民、といふ考の去りしことなく殊に宗教道德と國民生活の有樣を想ふと全宵殆んど眠を得ざることも有之候、何處に果して日本の如き國家ありや、日本は眞に山川の美天然の妙を以て誇るも、退て國民生活の有樣を顧みば果して如何、日本は其歴史其國躰を以て世界に立たんとするも、今日國民社會的道德の破頽を顧みば果して如何、無精神無活力而して狹量輕卒に、其の富の黙其の道德、其知力の點は正さに中以下の國家と相比すべく誠に遺憾の次第愈々記憶すべきことゝ存候云云。

宍戸氏は明治二十九年渡米せられ桑港にて勞役苦學數月其奮發と堪忍は遂にデカガ市の醫學校に學ひ一通の學業を卒へ去つて英國を通覽し獨乙ハンボルグ市にて勞働を爲し勤勉怠らす今や同國ベーメン市の學校に入りて一層醫學研究を爲しつゝあり此書は即ち獨乙ハンボルグ市に在りて送られたる數通の書中より拔粹したるものなり氏は堅忍不拔の我邦男子なり（記者）

## 某氏君書翰

當地（桑港）はあまり澤山の日本人が入り込みし爲めにや支那人居留地の如く日本人のみに

て充分なる交通をなし候も、此等の日本人は皆な平々凡々の輩のみにて米國の土にありながらも、文明の空氣を呼吸し能はず、米人を目して毛唐と叫び、相會すれば實に猥褻極まる俗話をなし人をして思はず耳朶を蔽はしむるが如き下等動物にして此等の墮落は書生百姓商人等一般に浸入致し居候

日本にある頃は自分の力を量らず法外の法螺を吹き飛し候へども今は空中樓閣の考を打破し最も實用的にして最も確實なる事業を修め度候即ち日本今日の狀態に必要なる工業學を修め之を土臺として餘力あれば他に及び度候云々。

水尾義雄君書翰

學校の休業中は一奮發と思ひ居る內、不幸にして熱病にかゝり臥蓐するの止むを得ざるに至り候、この前宇高氏も同病の爲め三ヶ月間病床に呻吟仕候間何となく心ならず早々アラメダに二ヶ月程保養する心算にてクックの眞似をして一周間四弗を得て働き後ち桑港に出で候要するに此の病氣の爲め一打擊を受け多少の資金を得る迄は學問騷ぎを致さず候、ハイスクールの科學の程度も恐ろしき程の事も無之語學も研究して直接に大學入校試驗を受けんものと思ひ居候、桑港に居る日本人に碌な奴は無之十中八九は、桂庵ゴロッキ他はデレ助にて眞平交際仕らず、一ヶ月に一度風呂散髮買物に外出する丈けに候云云。

水尾氏は在京中時事新報又は國民新聞の配達をなし時には電話の交換手となり慶應義塾の中學部を卒へ昨年六月に渡米せられし苦學生なり（記者）

宍戸氏の書翰（在獨乙ハーメシ）

其後甚御無沙汰多罪の至奉存候先生には彌々御壯健爲國家御盡力の御事此上無く喜はしく奉存候勞働世界每度難有頂戴仕候當地も今は冬の氣候にて雪も降り滿目の景色此上無く美觀に御座候兼て想像罷在候獨乙國の冬景色中に逍遙罷在候小生は神の御惠の內にハンボルグを去り今では（基督學校）當校に專ら獨乙語の修業信仰の練習をなしつゝ罷在候間御安心被下度當地は獨乙中にても有名なる基督敎的（進步せる）都市にて有力なる牧師傳導者多く有之候獨乙の事情御報導申上度候余は讓後便。

岸七之祐君の書

……降て迂生幸に何の異りなく自活の傍らハミルトンイヴニングスクールに通學致居り候……目下は追々クックも上達仕り妻君のヘルプを卒業し獨りにて料理致すよう相成從つて給料も多く得らるゝ樣の次第に候

兼て渡航費として借用せし金も本年末或は明年始には返濟仕り得る事に存候是又乍他事御安神被下度候

目下は主人に從ひ當バークレーなるサンマハウス（夏季別莊）に滯在致七月學校始まり次第歸桑の心算に候（三十四年五月廿三日認）（岸氏は本年一月一日横濱出帆渡米せられたり）

在桑港　藤井國太郎氏の書翰　（三十三年八月渡米）

新春之御慶茅出度申納候舊年中は不一方御厄介に相成難有御厚禮申上候尚ほ本年も不相變御提撕奉仰候小生義目下チークランド市マグノリヤ、アベニウ、エート町に滯在致し十五町のミッションに通ひ只管會話を研究致居候曾つて先生より承り居り兼て覺悟致し居たれど英語の出來ないために三家程放逐を喰つて隨分困難致し候乍併ら只今では御蔭樣にてケッチンウチークには差支無き迄に相成候且つ目下の處は非常に親切に取扱ひ呉れ夫れに時間も充分有之候へば專心一意勉學致し一通り會話の出來得るまては決して何處にも動かぬ積りに候在京中は非常の御厄介に相成候故せめて書面でも差上げて時々御動靜御伺ひ致度始終心に思ひ居り候へ共何かと忙かしきため遂に思ひ乍ら御無沙汰に打過き候段不悪御亮察願上候

# 渡米案内附錄

## 渡米に必要なる英語

英語の研究は小兒か其言葉を習ふが如し第一は實物に就ひて學ぶに在り第二は口傳に在り第三は文字に在り然るに是迄英語研究者か其記憶に困難なる爲めに多くは文字に依頼す故に實際に適せず試に顧へよ若し小兒が其言葉を覺ゆるに先づいろはを習ひ然る後に綴りを習ひて以て文字に依つて覺ゆるとせよ其迂遠にして目的を達せざるや明なり吾人は經驗に依つて外國の言葉を習ふには成りたけ文字に依らす言調にて記憶するの迅速にして且つ實用に適するを知る者なり故に左に掲くる英話は英字を用ゐず何人も知る我文字にて英語を記載して研究者の便利に供す英語は文字を覺て自ら綴りて話す人は自らは分るもかんぢんの英人には悟解されず唯外人間で（ピックドアップ）拾ひ上げた言葉は文字は知らざるも又不完全ながらも彼等外人には解せられて用を達すべし是れ吾人か英字を用ゐずして渡米者に英語を示さんとする所以なりとす讀者請ふ之を諒せよ（著者）



滿船會社　（スチーム、シップ、コンパニー）

●桑港迄の切符を下さい、
ギヴ、ミー、ア、チツケツト、フヲアー、サンフランシスコ、

●何等ですか。
ホワツトクラツスチツケツト、ヅーユーヲント?。

●一等(中等、三等、支那人等)の切符を下さい
ギヴ、ミー、エ、フヲルストクラツス、(セコンド、サールド、チヤイニース、スチーレーヲ)チツケツト、
於船中(ヲン、ボールド。)

●我室は何處に在りますか
ホエアー、イヅ、マイ、キヤビン?(上中等客のみに用ゆ)

●水を一杯下さい
ギヴ、ミー、サムウヲーター、

●どうぞ手拭を一ツ下さい。
プリース、ギヴ、ミー、ア、タヲル。(ギヴ、ミー、は我に下さい、即ち與へよなり)



石硯、(下さい畧す)サムソープ。お湯(飲む)サムハツト、ウヲーター。水(寒き)サムコールド、ウヲーター。燒酎。サムブランデー。御茶、サムチー。珈琲サムカヒー。

●何日桑港へ着しますか。
ホエン、ウィー、シャールビー、イン、サンフランシスコ?

次の(此の)土曜日、(日。月。火。水。木。金)着くでせう。
ウィー、シヤール、グット、イン、サンフランシスコ、ネキスト(ヂス)サタデー(サンデー。モンデー。チュースデー。ウエンスデー。ソルスデー。フライデー)

●船は何時に入港しますか、
ホエン、ウィル、ゼ、スチーマー、ビー、アット、ゼ、ハーバー?

●明朝九時頃でせう
イツト、ウィル、ビー、アット、アバウト、ナイン、ツモロー、モーニング。「九時、ナイン、頃アバウト、十時テン(但し朝、晩、晝、夜と云ふ字を用ゆる場合には時(ヂクロク)の語を添へず唯數のみで何時を顯はして可なり)」

上　陸、(ランデング)

紐育への滊車は何處に在りますか

ホエアー、イズ、ゼ、ニユーヨークツレイン？

余は日本人なり

アイ、アム、エ、ジヤパニース、

汝は何の爲めに來りしや

ホワツト、フヲワー、ハヴ、ユー、カム？

勉强する爲めに來ました

アイ、カム、ツー、スタデー。

汝は此國に友人を持つや

ハヴユー、エニーフレンド、イン、ヂス、カントリー？

余は數友を持てり、

エース、(然)アイハヴ、セヴィラルフレンヅ、

何處に住むや

ホエヤー、ヅー、ユー、リヴ？



彼等は桑港(アラメダ。チークランド。)に在り

ゼー、アール、イン、サンフランシスコ、(アラメダ。チークランド)

汝は此國へ始めて來たか

イズ、ヂス、ユワー、フホルストタイム、イン、ジスカントリー？

然り此か始めてゞある

エース、イツトイヅ、マイフホルストタイム、

## 於食堂、(インゼ、レフレッシメント、ルーム)

●すーぷを下さい。ギヴミー、サムスープ、

●パンとバタ。サムブレッド、アンド、バター。

羊肉。エ、マトンチヤツプ。葡萄、サムグレープス　林檎、サムアップルス、蜜柑、サムアレンヂス　葡萄酒、サムワイン。勘定書、ゼ、ビル(飲食物にはサムを附す習慣あり)

宿　屋(ホテル)

●余は一個のトロンクを持つ

アイハヴワントロンク。

●何々旅館まで乘せて(馬車)行つて下さい、

ドライヴミー、ツー、ホテル……！

●宿ることか來るか

ハヴユー、エ、ベッドルーム？

●余か室に明り(瓦斯)を付けて下さい。

ライト、ガス、インマイルーム。

●明朝五時。(六時。七時。八時)に起して下さい

コールミー、アット、フワイヴ。(シッキス。セヴン。エイト。)

●珈琲を持て來て下さい

ブリンク、ミー、カヒー。

朝　飯(ブレッキフワスト)

腿と卵(ステーキ。ハットケーキス)を下さい

ブリングミー、ハム、アンド、エッグス、(ステーキ。ハットケーキス)



胡椒(鹽、鉋丁、クマデ、サヲ、カップ)を取て下さい

パッスミー、ペパー。(ソルト。ナイフ。フホーク。カップ)

普通の言葉(コンモントーク)

如何ですか。ハウズーユーヅー？

難有變りはありませぬ。サンキユー、アイアムウエル。

御早ふムひます。グードモーニング。

今日はよい天氣です。イットイヅ、エ、フワインデー。

今晩は。グートイヴニング。

御休みなさい。グード、ナイト。

●又御出なさい。カム、エゲーン

●夫れは幾干ですか。ホワット、イヅ、ゼ、プライス、ヲヴ、ザット？

●夫れは餘り高い、イット、イズ、ツー、デヤー。

●まつと安いのはありませぬか。ハヴユー、エニーチーパー？

●夫れを買ひませう。アイ、ウイル、テーキザット。

●誰ですか。ブーイヅ、ゼアー！

御はいりなさい。カムイン！

御内ですか。イヅヒー、アット、ホーム？

知らぬから教へて下さい。プリース、テルミー、アイズー、ナット、ノー。

分りませぬ。アイ、カン、ナット、アダスタンド。

御出かけですか。イズヒー、アウト？

戸を閉ろ、シヤット、ゼ、ドアー。

窓を明けろ。チープン、ゼ、ウインドー。

今出掛る所です。アイ、アム、ゴーイング、アウト、ナウ。

注意しろ。テーキケアー、

何ですか。ホワット、イズ、サット？（物）

何と言なさるか。ホワット、ヅー、ユー、セイ？

月名一より十二、ジヤニユアリー、フエブルアリー、マーチ、エプリル。メー。ジユン、ジユライ、オーガスト、セプテンバー、オクトーバー、ノーヴェンバー、デーセンバー。



## 單語

于葡萄。レーズンス。木實。ナツツ。くるみ。チールナツ、。いちご。ストローベリース。栗。チエストナツ、。野菜。ヴェヂテブルス。菉豆。ビース。蔦菁。アイリシポツテートース。しやけ。サルモン。鯉。カープ。饅。イール。鯖。マクレル。牡蠣。オイスター。牛肉。ビーフ。羊肉。マトン。兒牛肉。ビール。兒羊。ラム。豚肉。ポーク。雞。チツキン。家鴨。ダック。七面鳥。タルキー。鳩。ピジヨン。兎。ラビツツ。鹿肉。ヴエニソン。黄瓜。キユーコンバー。人參。カーロツツ。蕪。ターニツプ。杏子。エツプリコツツ。桃。ピーチス。梅。プラムス。櫻子。チエリース。無花果。フヒグズ。西瓜。メロン。寢床。ゼ。ベッド。枕。ゼ。ピロー。鏡。ゼ。ルツキンググラス。蠟燭。カンドル。筆。ペン。墨。インキ。紙。ペーパー。吸墨紙。ブロツチングペーパー。封筒。アンヴェロープ。郵便切手。ポステーヂ、スタンプ。

米國桑港日本人宿所一斑。

領事館　カリホルニア街四二〇

日本人協議會　カリホルニア街七一三

正金銀行　モンガメリー街五一五
東洋汽船會社　マーケット街四二一
青年會　ハイト街一二一
美以教會　バイン街一三二九
福音會　グリー街七二五
聖公會　バイン街一〇一〇
長老會館　プロスペクトプレース二二
新世界新聞社　バウエル街一〇一六
佛教青年會　ポーク街八〇七
大日本人會　オツファレル街三二二半
公同會　ブツシユ街八四九
鹿兒島縣人會　メイソン街一〇〇三
山口縣人會　ブツシユ街八四九
廣島縣人會　ゼツシー街五二一



和歌山縣人會　グーリー街五八三
靴工同盟　グローヴ街四〇
山梨縣同志會　ブツシユ八四九
山梨縣鄉友會　チヤザン街一
日米新聞社　ゴールデンゲート街一一二
●街はストリートなり

附錄終

明治三十四年八月七日印刷
明治三十四年八月十日發行

不許轉載

著者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　片山潜
發行所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　勞働新聞社
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　吉見繁藏
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

82
391

8.4.15